

568-153



1200601411001



568

153



I 種
W



1200601411001



もう、一と昔にもならう。

まだ、學生で居ながら、金釦の制服なんか、いつに着たことは無く、上野の杜に珍らしく、縞の着物に角帯、といった姿で、恐る／＼、校門を潜つては、ひそかに悦こびと誇りを感じて居た。『朝寝髪』はその頃の産物である。

震災で絶版になつたのを、書肆の頼みで複製することになつた。内容は殆んど前のと大差なく、歌や小説は、凡て、その頃の自分の好きな人の作品の中から、一番自分の心をいたはり慰めてくれた、一層好きなうれしいもののみを撰むたのである。だから、その頃の自分にとつては、それらの歌や文

章は、それ／＼に貴とい寶玉なのである。

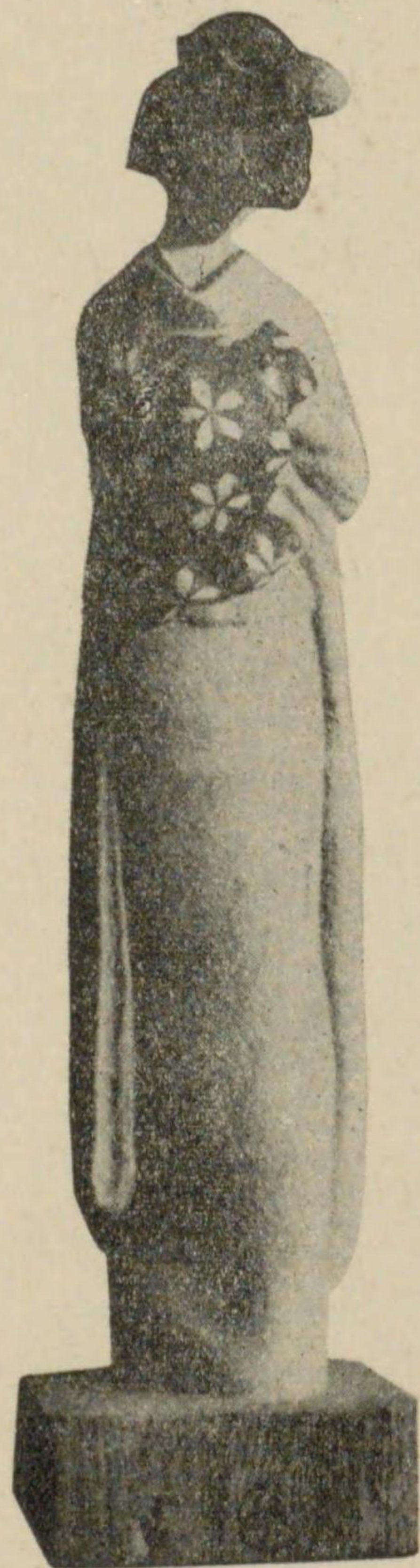
繪は、木版も凸版も凡て新らしく畫きなほすことにした。ところが、前の繪は繪としては未完成ではあつたが、それには、犯し難い純情があつた、詩の分量も、情感も、非常に美しく、多量に含まれて居た。

新らたに畫きなほすことによつて、現在の若い人達から盛んに持映されて居るところの挿繪なるものが、餘りに、詩も、美も、情もない、まるで、物差でも計つたやうな、冷めたい理詰めの繪の多くに占められて居ることによつて、つく／＼と『文化の悲哀』を感じさせられる次第である。

しかし、自分は、この畫集のために、十年前の若さに立ちかへつたやうに、心ゆくまゝ昔を偲び、追憶の樂しみの中に、ひたすら繪筆を執ることが出來た。ねがはくば、この樂しみの心の消え失せぬうち、更にまた次の繪筆を續けて見度いと思ふ……………。

この繪が、よしや、今の時流に合はなからうとも、また多數讀者諸君にまみえ得るだけの現代性とやらが無からうとも、それは自分の知らないところである。

朝寝後



二一五三
田



三
しんせう

三

朝寝髪われは梳らじうつくしき
君が手枕ふれてしものを

二



いらぬ煙管の羅宇が長うて
様と寝た夜の短かさよ

ぬしの来る夜は宵からしれる
締めた扱帯がそら解ける



小島虎次郎

いらぬ煙管の羅宇が長うて
様と寝た夜の短かさよ
ぬしの来る夜は宵からしれる
締めた扱帯がそら解ける

思おもひ出だすよぢやおろかこでもる
思おもひ出ださずに忘わすれずに

春はるの夜よなればせめても君きみの
泣ないた涙なみだに千兩せんりやう出だそ



春霞はるがすみ

ひくや由緒ゆかりの黒小袖くろこそで

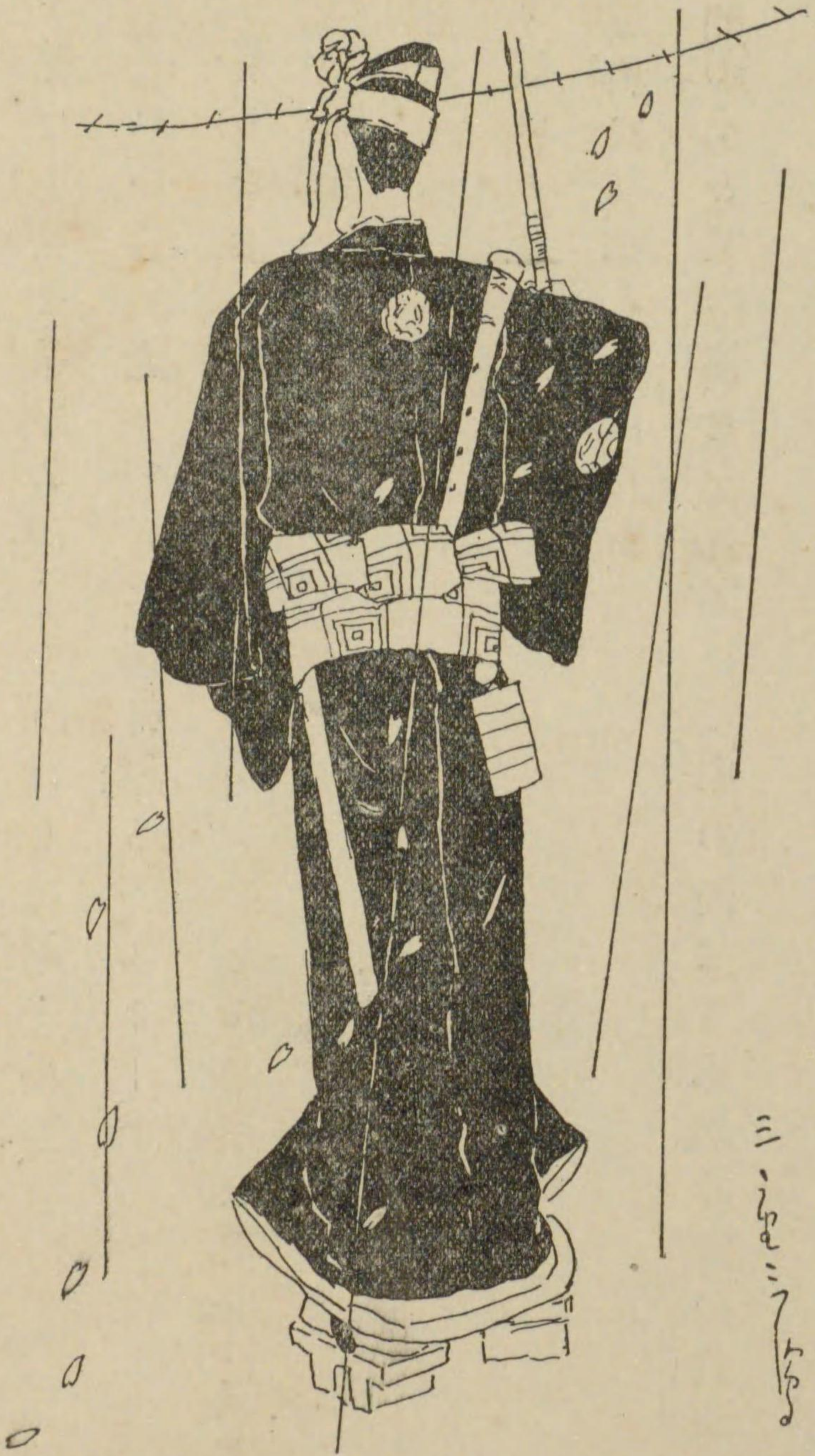
これもゆるしの色里いろざしへ

根ねさして植うゑし江戸櫻えどざくら

松まつの刷毛はけ先さきつき額びたひ

東男あづまおとこのいでたちは

間夫まぶのなとりの草くさの花はな



三三三三三三三三三三

『モウ好いやね、』

ト膝に引寄せ、後から視くやうにして態と小聲、

『これから何處へ行くエ、何軒廻るの、エオイ、』

「知りませんね、」『直ぐ行くのかい。』「そんな事は自分に聞いて御覽なさいな、」

『然うか、』

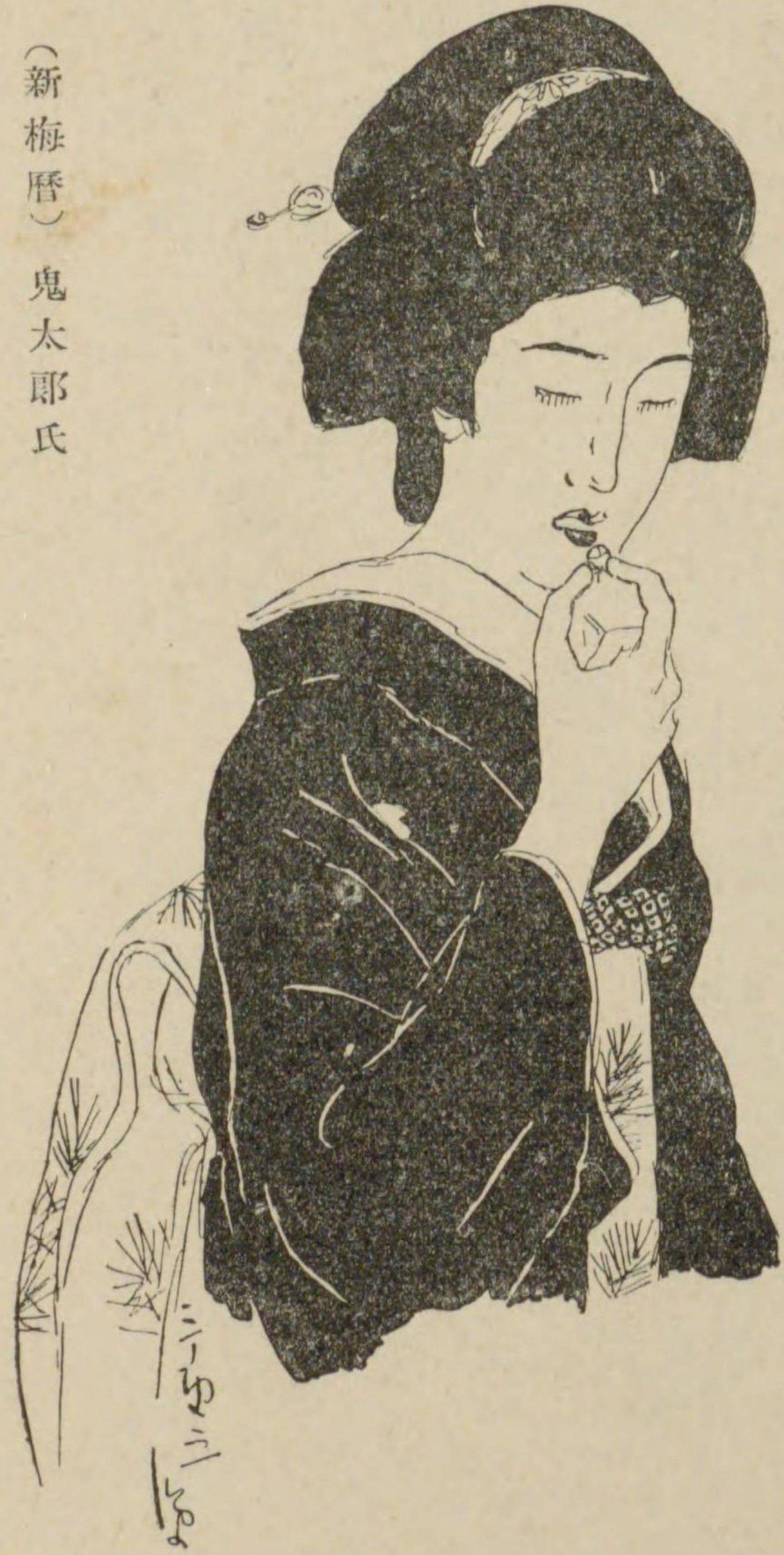
トばかり顔と顔、

『熱いな、飲んだんだね、』

ト聞くと其の儘身を捻向けて床の間なる鉢植の梅の蕾を

一輪取つて前齒に噛み、

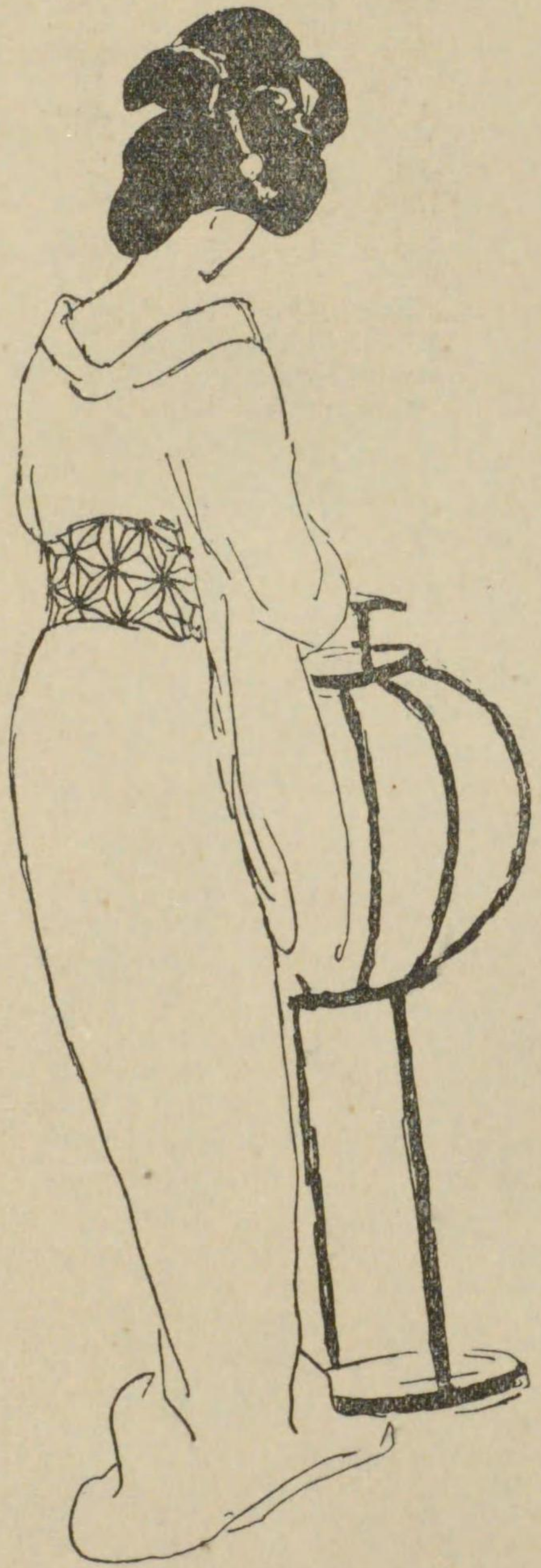
「皆な苦勞をするんだね、」

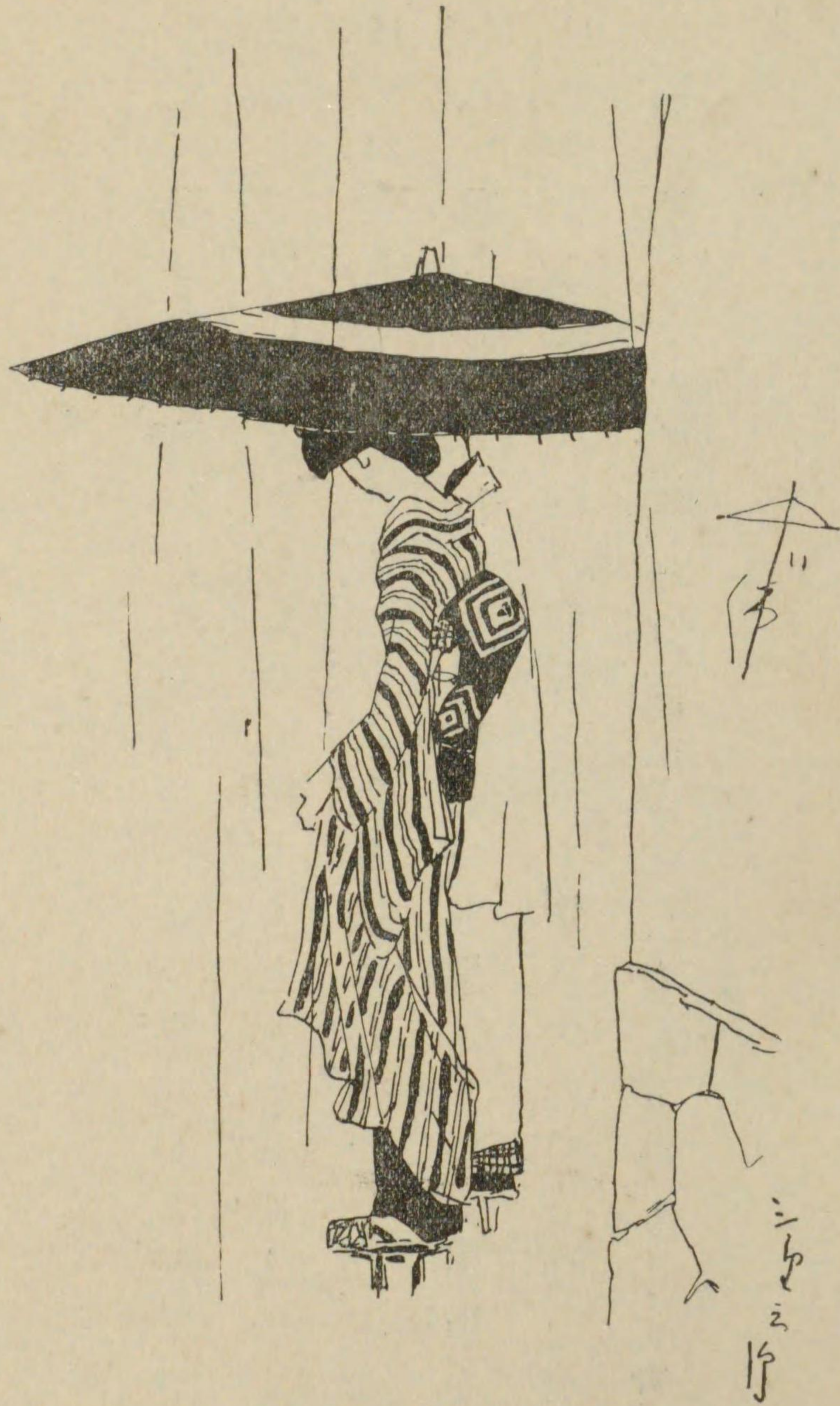


(新梅曆) 鬼太郎氏

文^{ふみ}はやり度^たし我^わが身^みは書^かかず
もの^{もの}を言^いへかし白^{しろ}紙^{かみ}が

戀^{こひ}に焦^{こが}れて鳴^なく蟬^{せみ}よりも
鳴^なかぬ螢^{ほたる}が身^みをこがす





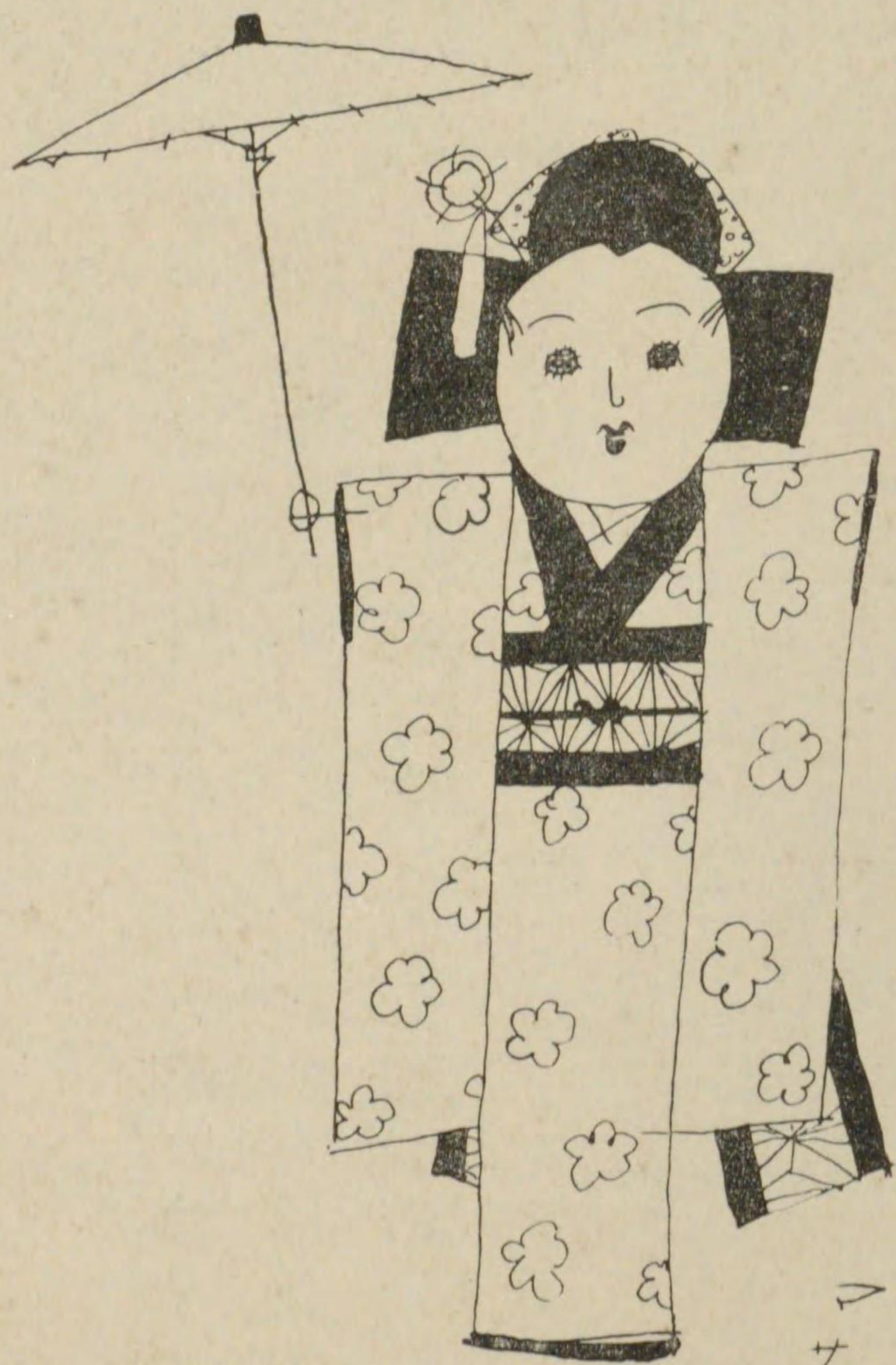
二三

三
三
三

春雨に
 相合傘の柄もりして
 つひ濡れそめし袖と袖
 誰しら壁と思ふ間に
 いろと書かれてゐるわいな

二三

餘んまり逢ひたさ懐かしさ、もつたいない事ながら、観音さまをかこづけに、逢ひにきたやら南やら、しらぬ在所もいとひはせぬ、二人一しよに添ふなら、飯も炊ふし織つむぎ、どんな貧しい暮らしでも、わしや嬉れしいと思ふもの、女の道を背けとは、きこえぬわいのどうよくと、恨みのたけをいうぜんの、振の袂にきた時雨、はれ間はさらになかりけり……(野崎村)



朧夜に、星の影さへ二つ三つ、四つか五つか鐘の音も、もしや
 我身の追手かと、胸に時うつ思ひにて、廓を抜けし十六夜が、
 落ちて行く衛も白魚の船の簀に網よりも、人目厭うてあと
 先に、心置く霜川端を、風に追はれて來たりける………

…(梅柳中宵月)



朧夜に、星の影さへ二つ三つ四つか五つか鐘の音も、もしや
我身の追手かと、胸に時うつ思ひにて廊を抜けし十六夜が、
落ちて行く衛も白魚の船の簀に網よりも、人目厭うてあと
先に、心置く霜川端を、風に追はれて來たりける………
………

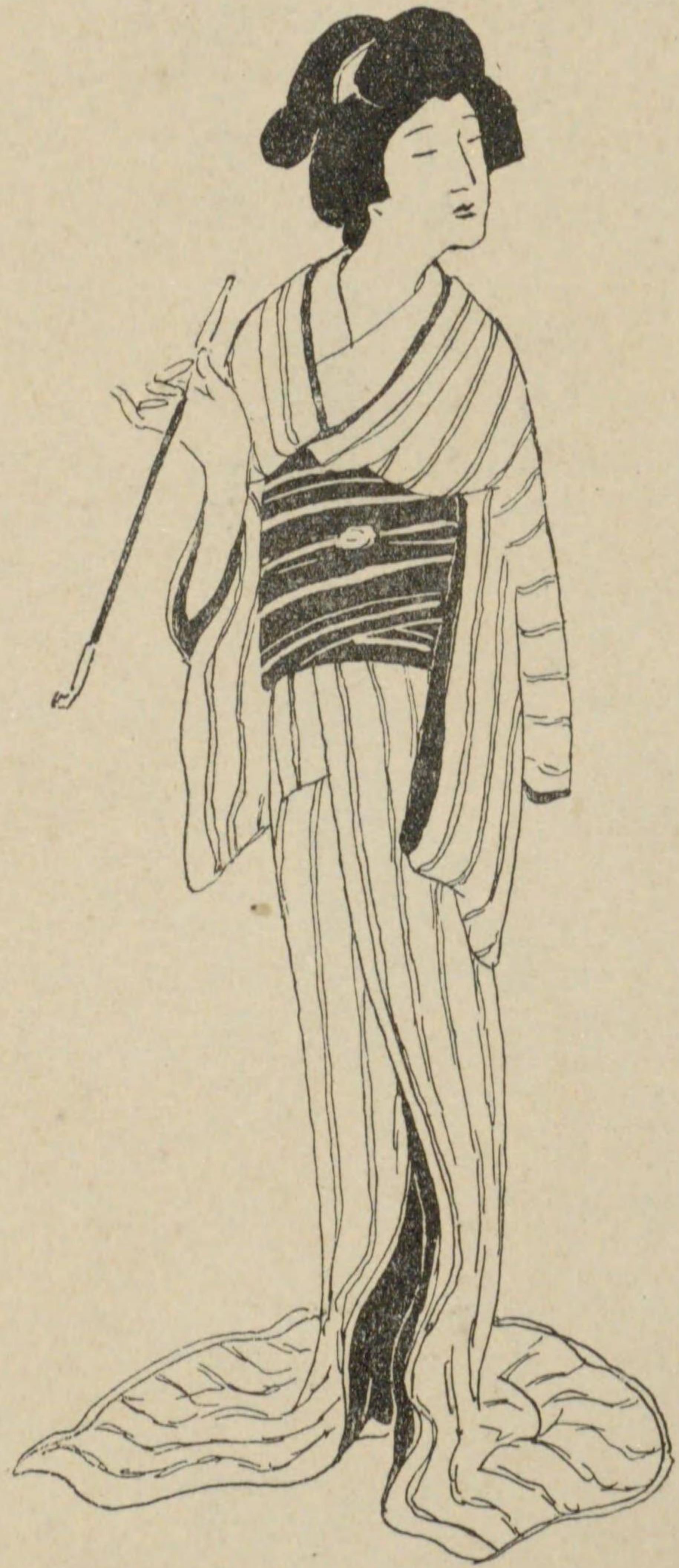
………(梅柳中宵月)



ニハミヤノ

可愛お方に謎かけられて
解かざなるまい繻子の帯
何がなんでも添はねばならぬ
たとへ蓮のうてなでも





一
九
五
三
〇

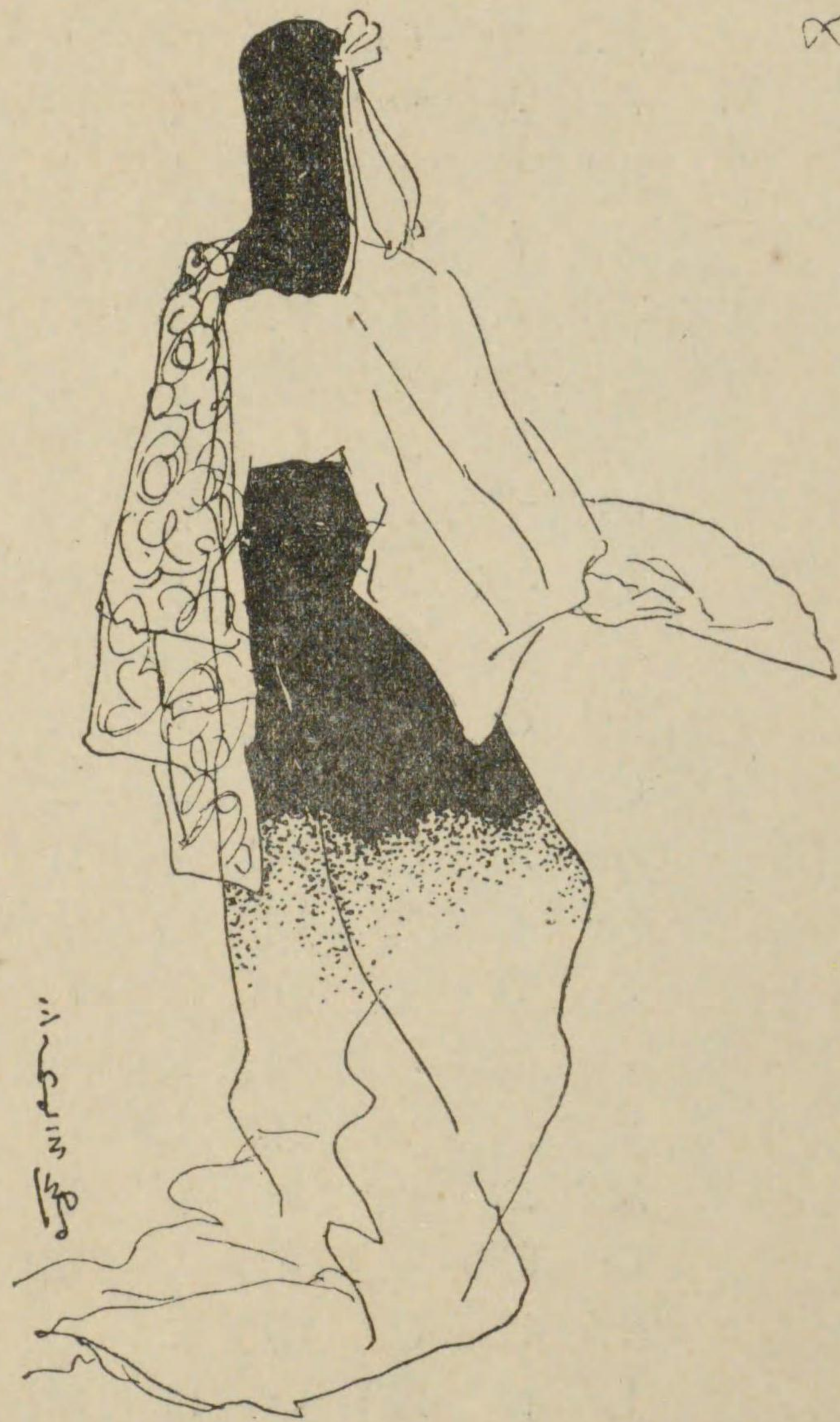
細腰さいえうもあやふげなればいかでこの
春はるに堪たへむや秋あきに堪たへむや

菊龍きくりゆうのゆうべほつるる鬢びんの毛けに
たはむるるべく風かぜとならばや

(勇氏)

蝶は菜種の味知らず
菜種は蝶の花知らず
知らず知られぬ中ならば
狂ふまいものあぢきなや

∞



ハルノハ

白粉で塗り隠された菊勇の頬にはまだ仇なさを知らぬ
 涙が幾しづくとなくしたたり落ちた。そのひとしづくには
 蜷川を流れる水の濁りはなくて丁度白川砂の底から湧い
 てくる泉のやうな淨らかさが輝いて居た。それを彼女は友
 禪の振袖でそつと人知れず押し拭ひながらさう云ふ時には
 きまつて思ひ出す幼馴染のお小夜はんのことを思ひ出し
 た。

(夢占) 幹彦氏



二二
 二二
 二二

君きみは今いま頃ごろ駒こま形がたあたり
聲こゑも高たか尾をのそり節ぶし

君きみと寝ねやうか五千石ごせんごく取とるか
なんの五千石ごせんごく君きみと寝ねる



三つと三つ

あとには二人差合も涙ぬぐうて三千歳が恨めしさうに顔
 を見て、僅か離れて居てさへも、一日逢はねば千日の思ひに
 わたしや病うて、針や薬のしるしさへ、泣の涙に紙ぬらし、枕
 に結ぶ夢さめて、いとど思ひの十寸鏡見る度毎に面瘦せて、
 どうで長らへ居られねば殺して行つて下さんせと、男に縊
 り歎くにぞ………(忍逢春雪解)





いろがある
承知で惚れた横戀慕
言ひ出すからには何處までも
立てて貫はにやならぬぞえ



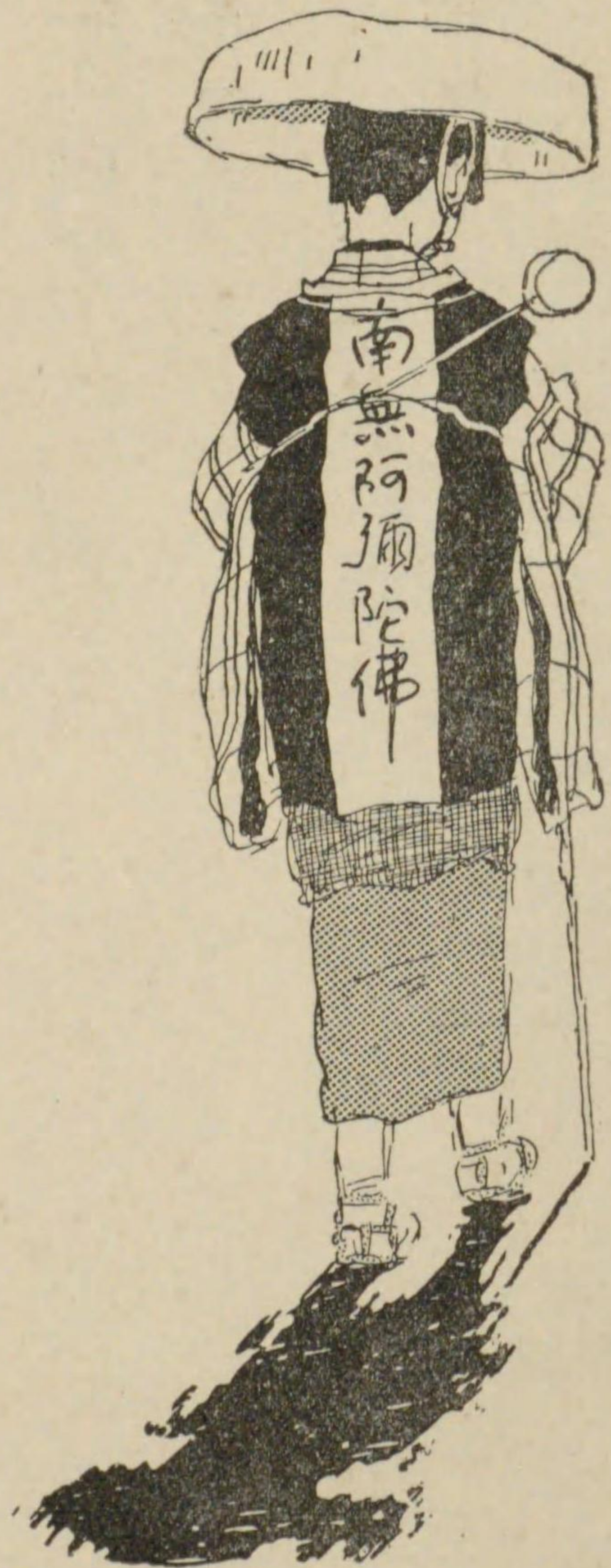
いろがある
承知で惚れた横戀慕
言ひ出すからには何處までも
立てて貰はにやならぬぞえ

捨てた身體だ七兩二分も
どこから斬るなと縛るなと



お互^{たが}ひに
知^しれぬが花^{はな}よ世^せ間^{けん}の人^{ひと}に
知^しれりや二^{ふたり}人が身^みのつまり
あくまでお前^{まへ}に情^{じやう}たてて
惚^ほれたが無^む理^りかえ しよんがいな
ほれたが無^む理^りかえ





ふだらくや岸うつ波はみくまのの

那智の御山にひびく瀧つせ

年はやうやうとなどの道をかけたる笈摺に、同行二人と

記せしは一人は大悲のかけ頼み

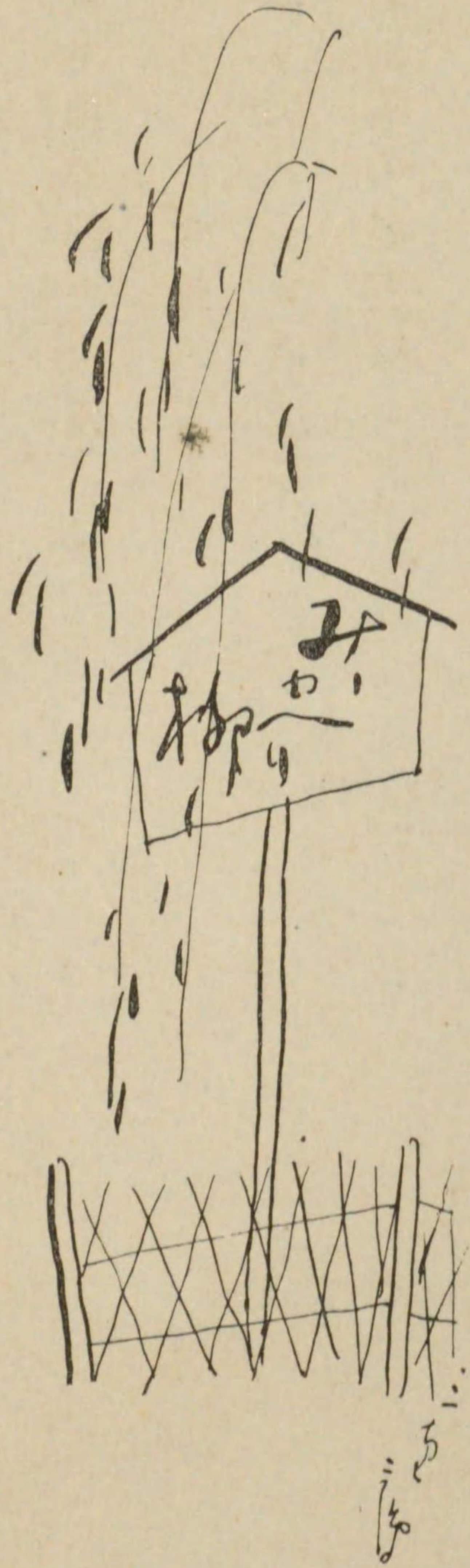
ふる里をはるばるここに紀三井寺

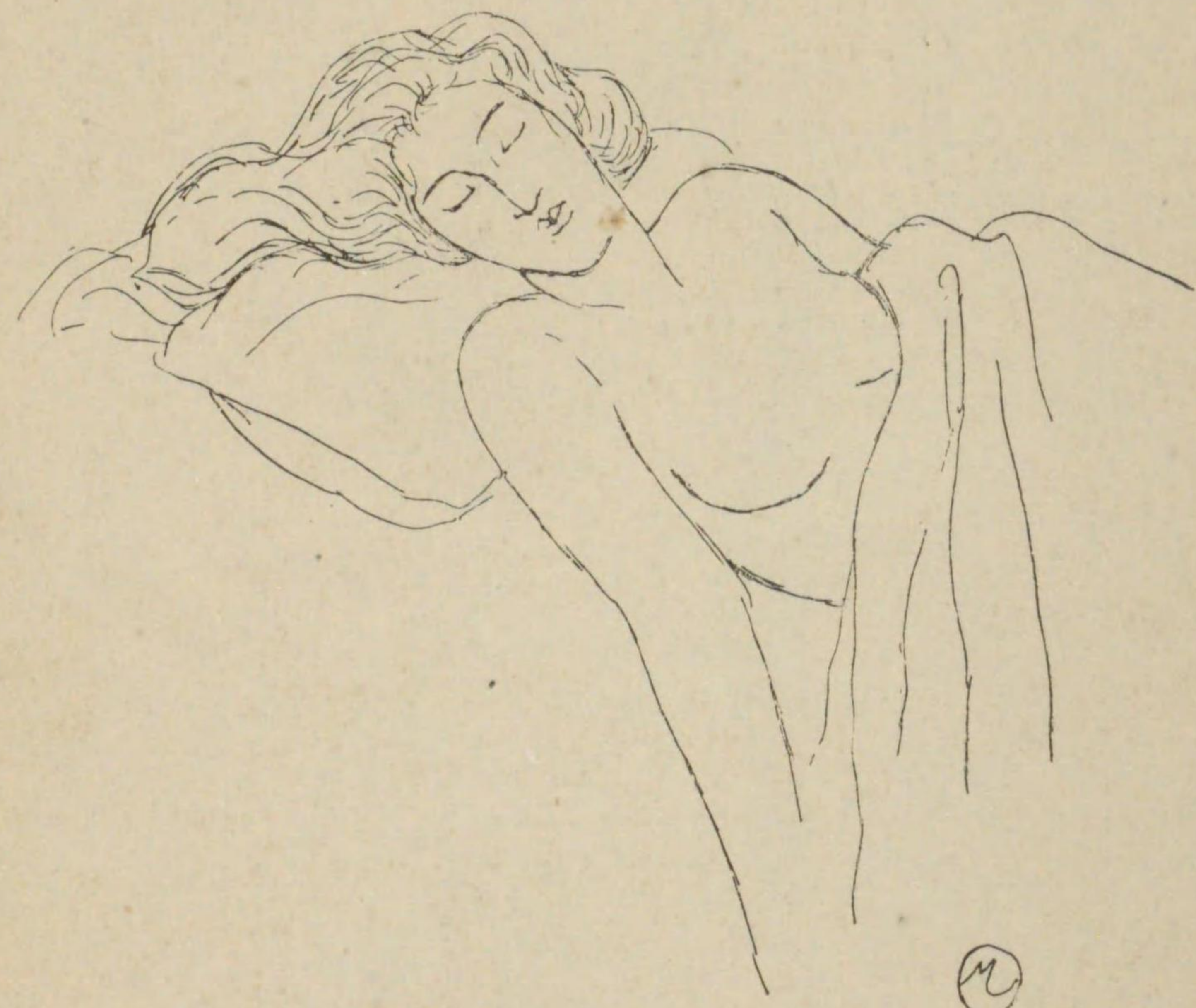
花の都も近くなるらむ

「順禮に御報謝……」

といふもやさしき國訛り……（阿波の鳴門）順禮歌

日本堤の編笠扮装
見かへり柳振りもよく
振り出せく六法姿の
丹前男の巻羽織



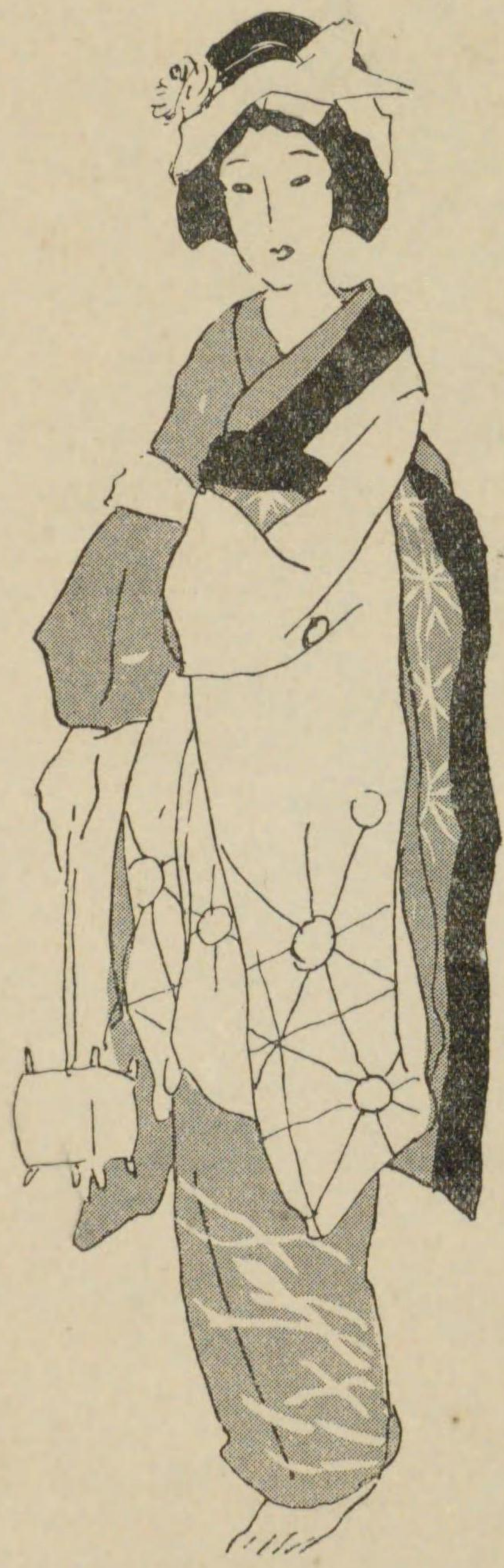


㊦

あはれまたねむりたまふやたまさかに
逢ふ夜はわけて短きものを

ぬばたまのいもが黒髪こよひかも
われなき床になびけてやぬらむ

戀こひの山路やまぢの露つゆふみ分わかけて
 慕したひくるく、小手て巻まきの
 只ただ一ひとと筋すぢにいとしらし
 竹たけに雀すずめはしなよくとまる
 とめてとまらぬ色いろの道みちかいな
 後のちの世よ契ちぎる妹いも脊せ山やま



ニ・カ
 三九



鬢びんのほつれは枕まくらのとがよ
それをお前まへにうたぐられ
勤つとめする身みは是非ぜいひもなや
苦界くがいぢやくゆるさんせ



三
五
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

鬢びんのほつれは枕まくらのとがよ
それをお前まへにうたぐられ
勤こまめする身みは是非ぜいひもなや
苦く界がいぢやくゆるさんせ

ひとことが十ことに向ふうれしさは
忘れよものか忘られぬ
うそにも惚れたを實にして
エ、暮らすえ



偕此の夜は別れて更めての次の日、土橋さんが會社から歸り掛け、花川へ寄つて見れば、小房さん淡紅色の手絡で小意氣な丸鬘、土橋豊子と云はぬばかりにして、桐洞の火鉢に湯沸を掛けてチンと控へて居る

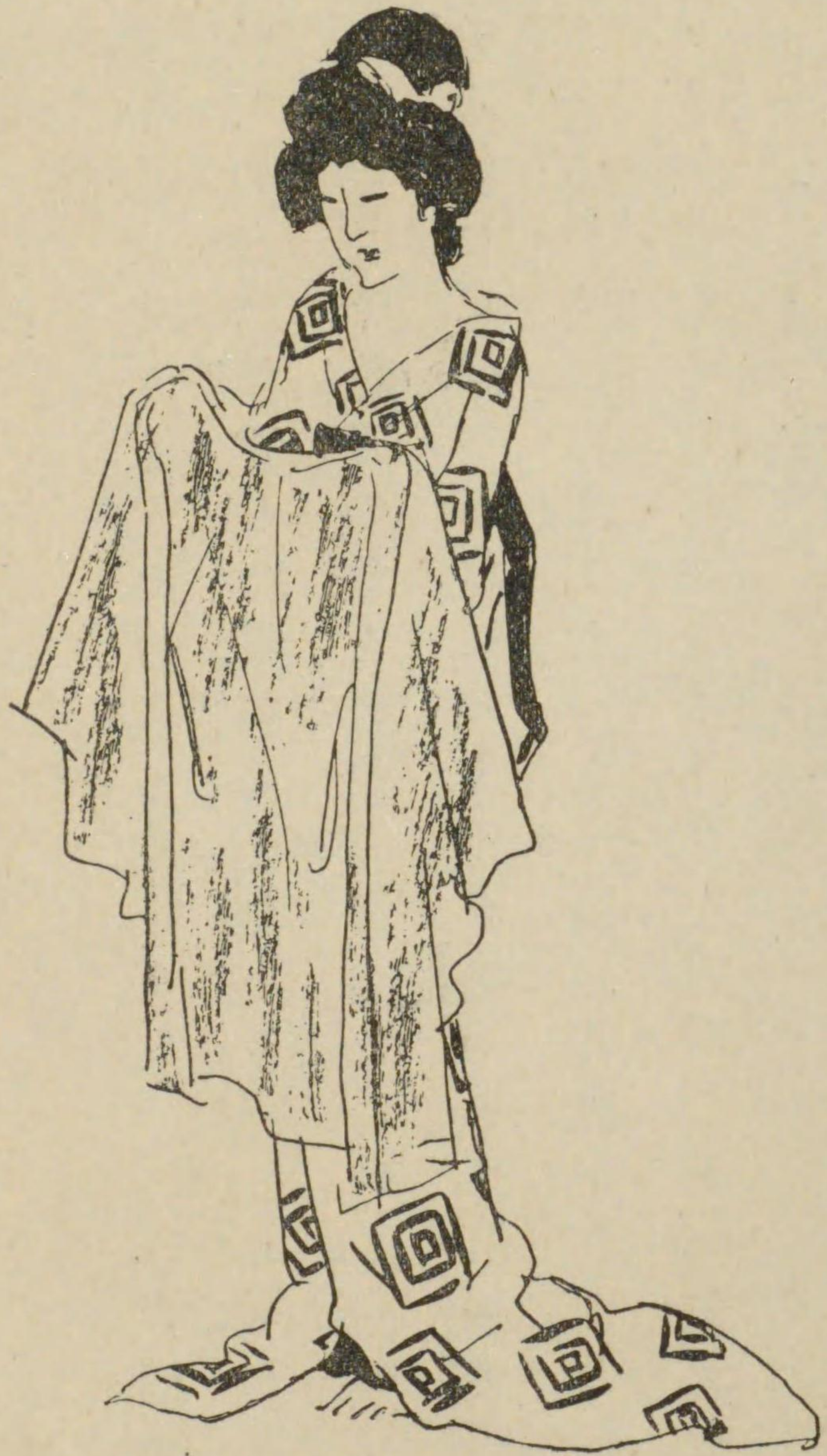
ヤアと云つた土橋さん、道樂者だけに結句此の心意氣を買込んだ御機嫌、迷はせ了ひに罪の深い事をするねと笑ふと、今まで可愛がつて戴き放しの氣が濟まず、自分だけの心行りに丸鬘に結ひましたと作り飾らぬ女氣の美さ、これには如何な腕好しも刃向かはれず、酷い目に遭はされるものだ

とばかり、男の子好き好んで甘くなる。(黒髪) 鬼太郎氏



煙草一葉が千兩しよとまゝよ
さまの寝たばこ絶やしやせぬ

三月喰はでも三年着でも
ぬしに着せたい紗の羽織



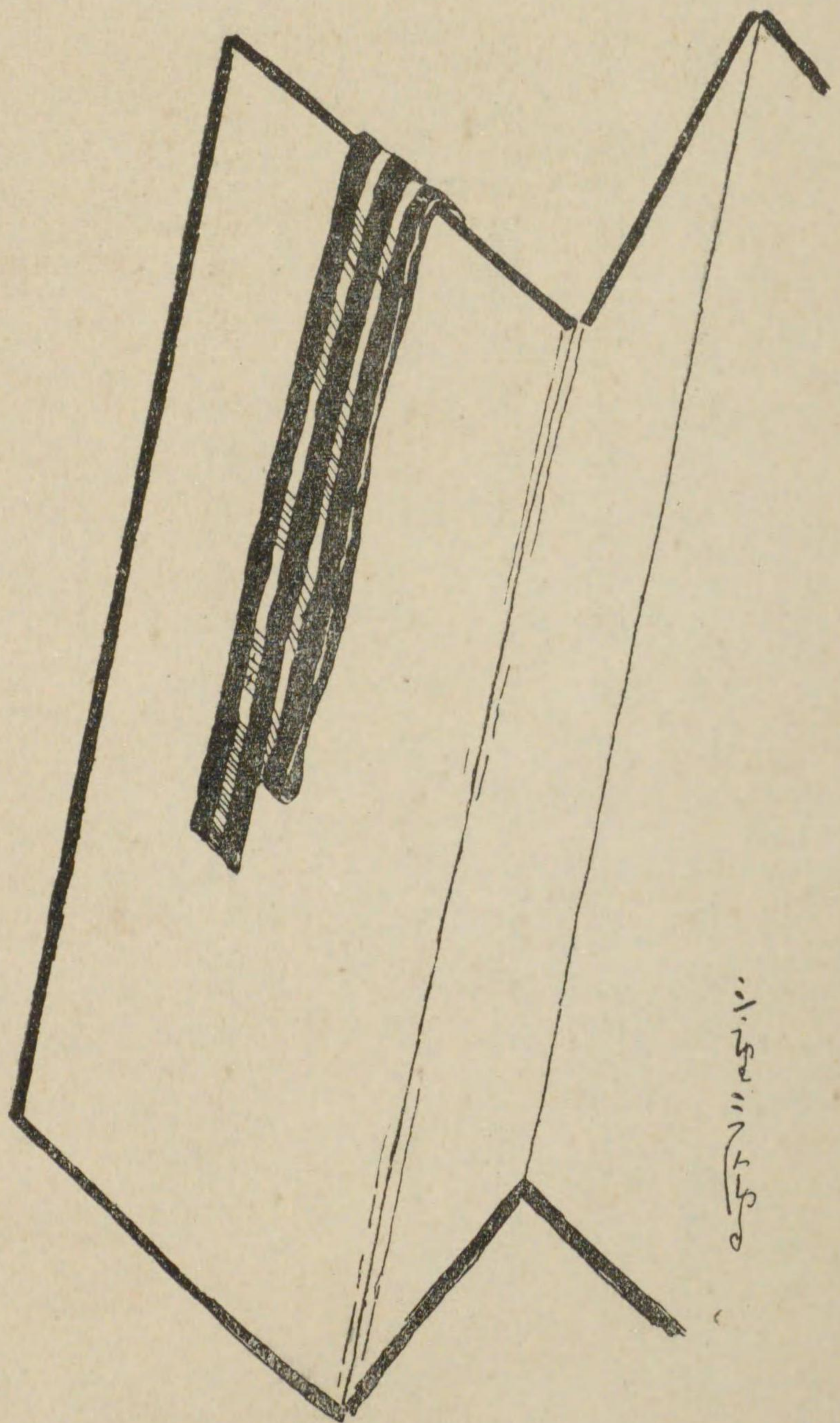
お前の姿を繪に畫かし、見れば見る程美しくしい、こんな殿御
と添ひ臥しの、身は姫ごぜの果報ぞと、月にも花にも樂しみ
は、繪像のそばで十種香の煙も香花となつたるか、回向せう
とてお姿を、繪には畫かせはせぬものを、魂かへす反魂香、名
畫の力もあるならば、可愛とたつた一言の、お聲がきゝたい
きゝたいと、繪像のそばに身をうち伏し、泣涕こがれ見えた
まふ……………(廿四孝) 十種香



源氏車のあとへは引かぬ
意地と我慢の江戸氣質
解つてそしてお前は程がよい



源氏車



小柴をしむるが如く

おさん何にヨする行燈のかげで
可愛い男の帯くける
山で小柴をしむるが如く
今宵其様とゞめあかす



小夜千鳥

『そんなら私が禿ゆゑ、その相手にはならぬかへ、ヲテしん
き、

『禿々とたくさんさうに、言うておくれな譯見習うて、やが
て悪所を島原の、ませよりそむるあいの花外で弄られ内
は堰かれ、ほんに身もよも霰ふる、雨の柳の出口まで、いくた
び通ふ小夜千鳥、鳴くやしよさいか味氣なや：（戻駕色相肩）



小夜千鳥鳴く

「そんなら私が禿ゆゑ、その相手にはならぬかへ、チテしん
き、

「禿々とたくさんさうに、言うておくれな譯見習うて、やが
て悪所を島原の、ませよりそむるあいの花、外で弄られ内
で
は堰かれ、ほんに身もよも霰ふる、雨の柳の出口まで、いくた
び通ふ小夜千鳥鳴くやしよさいか味氣なや : (戻駕色相肩)

切れた仲とは世間の勝手
逢はずに惚れてるまでの事

つんと濟ました其横顔に
拗ねて見る氣と書いてある



今朝のなあ
雨にしつほりと
また流連に永の日を
短う暮らす床の内
紙を引裂き眉毛をかくし
申しこちの人へ
わたしの替名は何とせう
あれ寝なんすか起きなんし
曙ならで暮の鐘



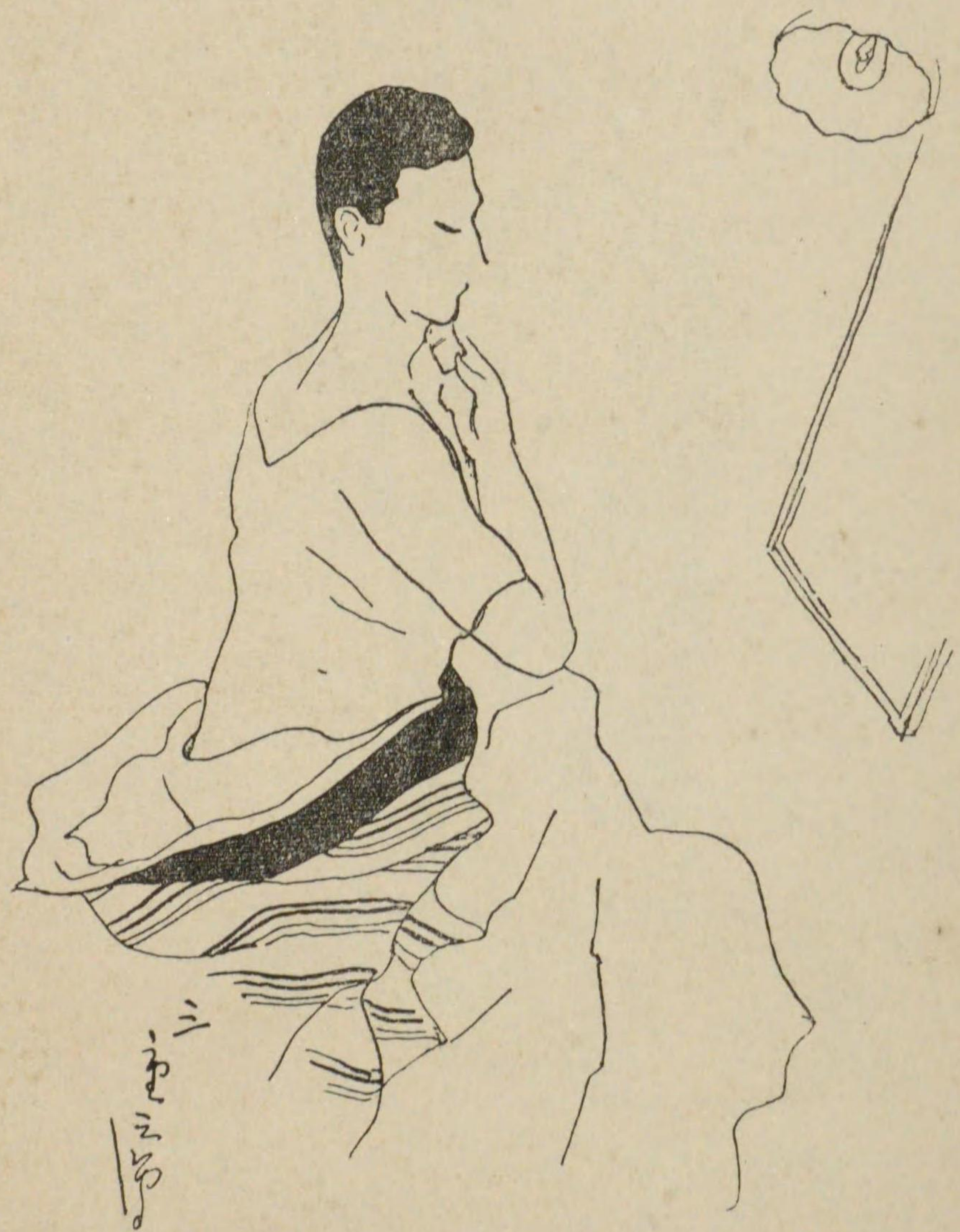
あんまりむごい情けなや、今宵離れてこなさんの、健で居さ
んすその身なら、又逢ふことのあらうかと、楽しむことのお
るべきが、かねて二人が取り換す、起請誓紙はみんなあだ、ど
うで死なんす覺悟なら、三途の川も是のやうに、二人手を
とり諸共と、何故にいうては下さんせぬ、殺しておいて行か
んせと、男の膝にすがりつき、身を慄はして泣き居たる、……
…… (明烏花濡衣)



明烏花濡衣

誰が見ても戀しくなれと云ふやうに
若衆かづらを君被くとき

菊の助きくの模様のふり袖の
肩脱がぬまに幕となれかし





逢^あひに來^きたれど戸^とは叩^{たた}かれず
唄^{うた}の文^{ぶん}句^くで悟^{さと}らんせ

こなた思^{おも}へば千里^{せんり}も一里^{いちり}
逢^あはずもどれば一里^{いちり}が千里^{せんり}

焦る、夫のあるぞとも、知らぬ盲の探り手に、戀ゆる心つく
し琴、誰かは憂を斗爲吟の、絲より細き指先きに、さす爪さへ
も八ツ橋の、やつれ果てたる身をかこち、涙に曇る爪しらべ、
露のひぬ間の朝がほを、照らす日かげのつれなさに、哀れ
一村雨のはらくくとふれかし………(朝顔日記) 宿屋



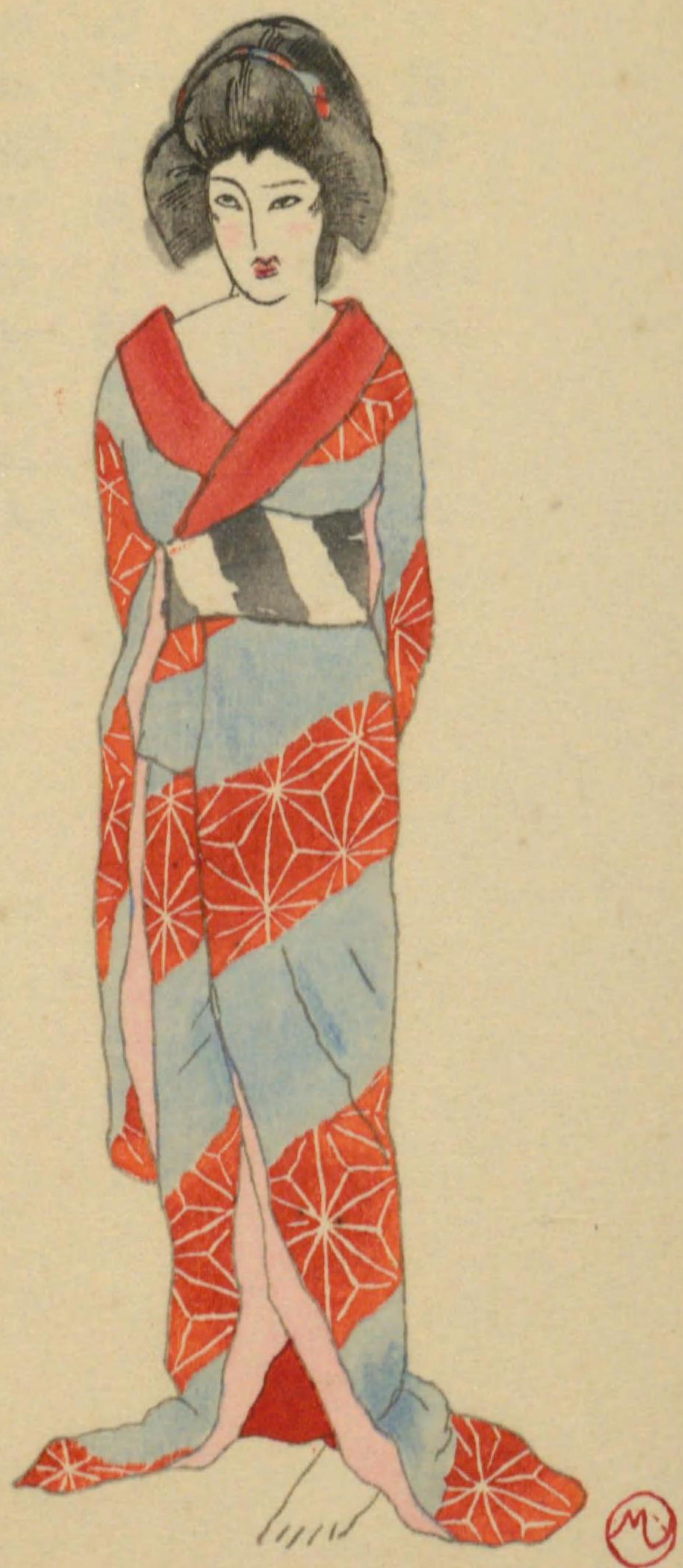
『吉三郎さんはこゝにも見えない、』

お七は手探りにその部屋の障子を押し開いて、又次ぎの部屋に出た、そこは恐ろしく深淵のやうに眞つ暗で、何所を當てに探る術もなかつた、お七はその眞つ暗な中に一人で暫らく立つてゐた。

春の夜の薄寒さが、お七の肌にしみて來た、お七は寢衣の袂を掻き合せながら、その寒さに刺されて自然と意識が返つてくると、急に恐ろしくなつてその部屋の中に立竦んだ。

(お七吉三) 俊子氏





「吉三郎さんはこゝにも見えない。」

お七は手探りにその部屋の障子を押し開いて、又次ぎの部屋に出た。そこは恐ろしく深淵のやうに眞つ暗で、何所を當てに探る術もなかつた。お七はその眞つ暗な中に一人で暫らく立つてゐた。

春の夜の薄寒さが、お七の肌にしみて來た。お七は寢衣の袂を掻き合せながら、その寒さに刺されて自然と意識が返つてくると、急に恐ろしくなつてその部屋の中に立竦んだ。

(お七吉三) 俊子氏

赤い扱帯が疊へこぼれ
様へまゐるの文字となる

色にするほど好きではないが
只のお客ぢやおけぬ人



うき中の

習ひとしらはかくばかり

花の夕の契りとなるも

始めのなさけ今の仇

いつそ逢はずば斯うしたことも

ほんにあるまいよしなや辛らや

仇に暮らせし月日のほども

言はずおもひの涙の雨に

いとゞ朽ちなん四つの袖



来いと言はれてその行く夜さの
足のかるさようれしさよ

闇夜なれども忍ばゝ忍べ
伽羅の香りをしるべにて



傾城に誠なしとは譯しらぬ野暮の口から意氣過ぎの粹の
粹ほどはまりも強くたゞ懐かしういとしさの愚痴になる
ほど戀しいものたとへこの身は淡雪と俱に消ゆるも厭は
ぬがこの世の名残今一度逢ひ度い見度いとしやくり上げ
狂氣の如く心も亂れ涙の雨に雪とけて前後正體なかりけ
り。(明烏夢淡雪)



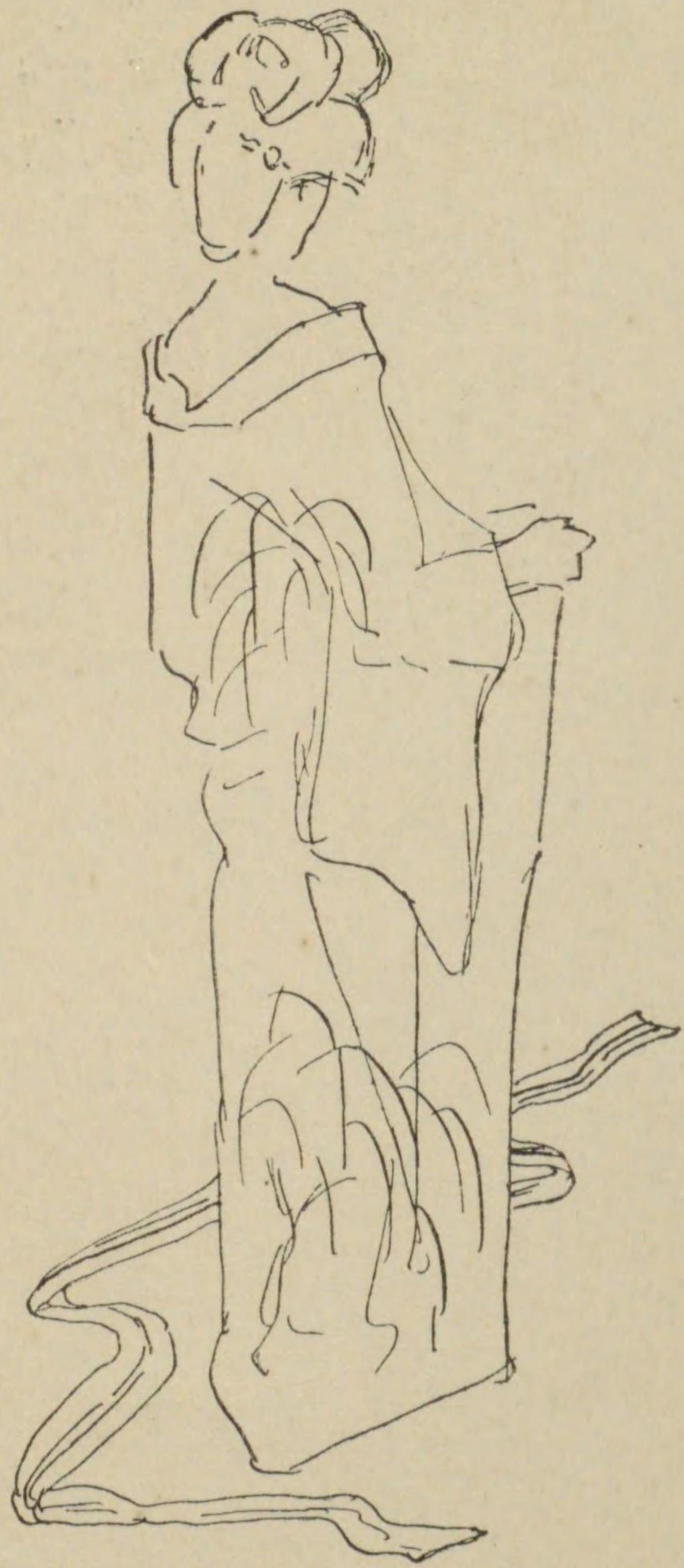
人妻ひとづまにいふは誰たがこと狭衣さころもの
その紐ひもとけといふは誰たがこと

なか／＼に人ひととあらずば酒壺さけつぼに
なりにてしがも酒さけに染しみなむ

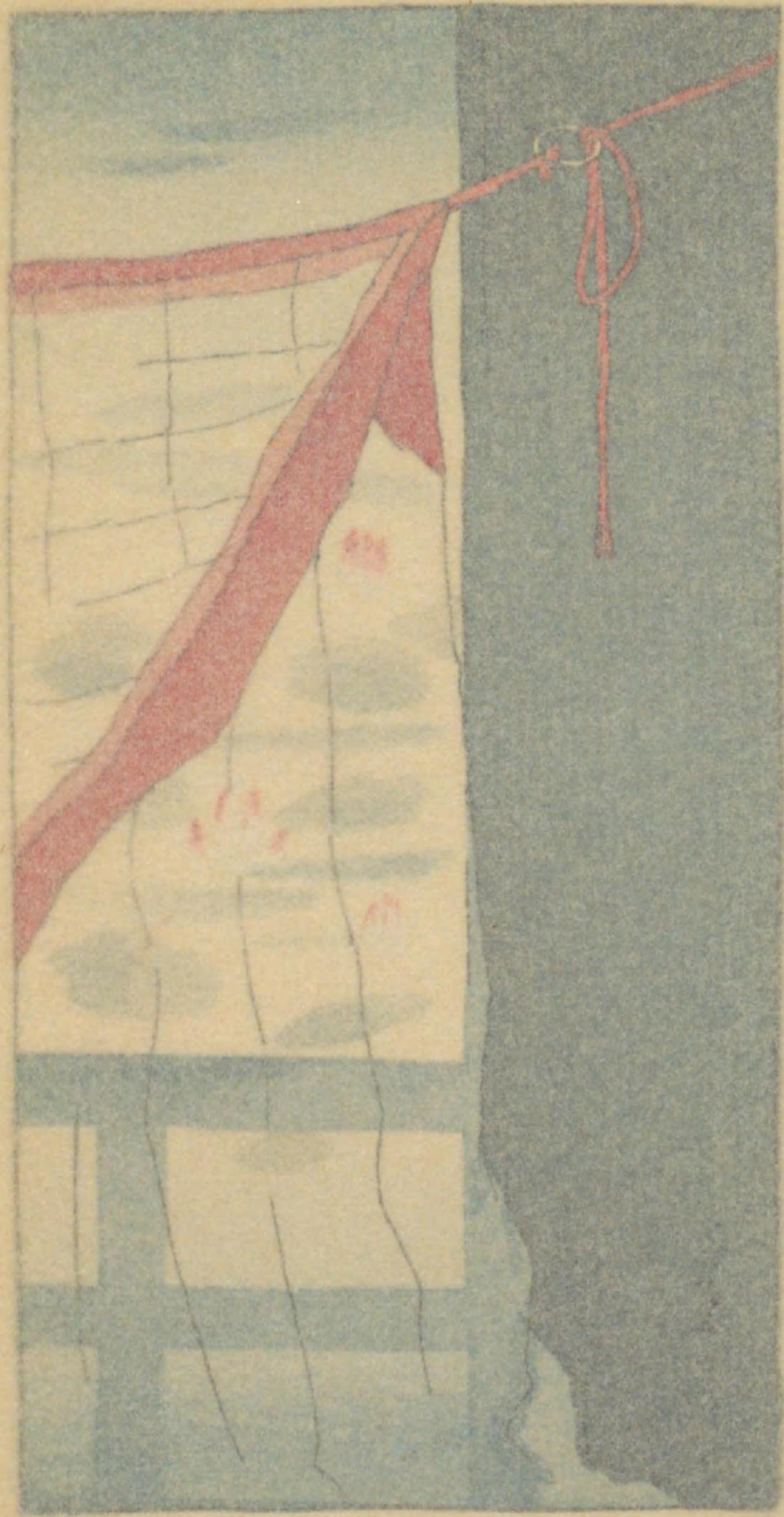


七三

ひとりして
結びし帯をふたりして
とけてぬる夜の短かさは
明けのむつ言今更に
別れのうさにくらぶれば
逢はぬ昔がましぢやぞい

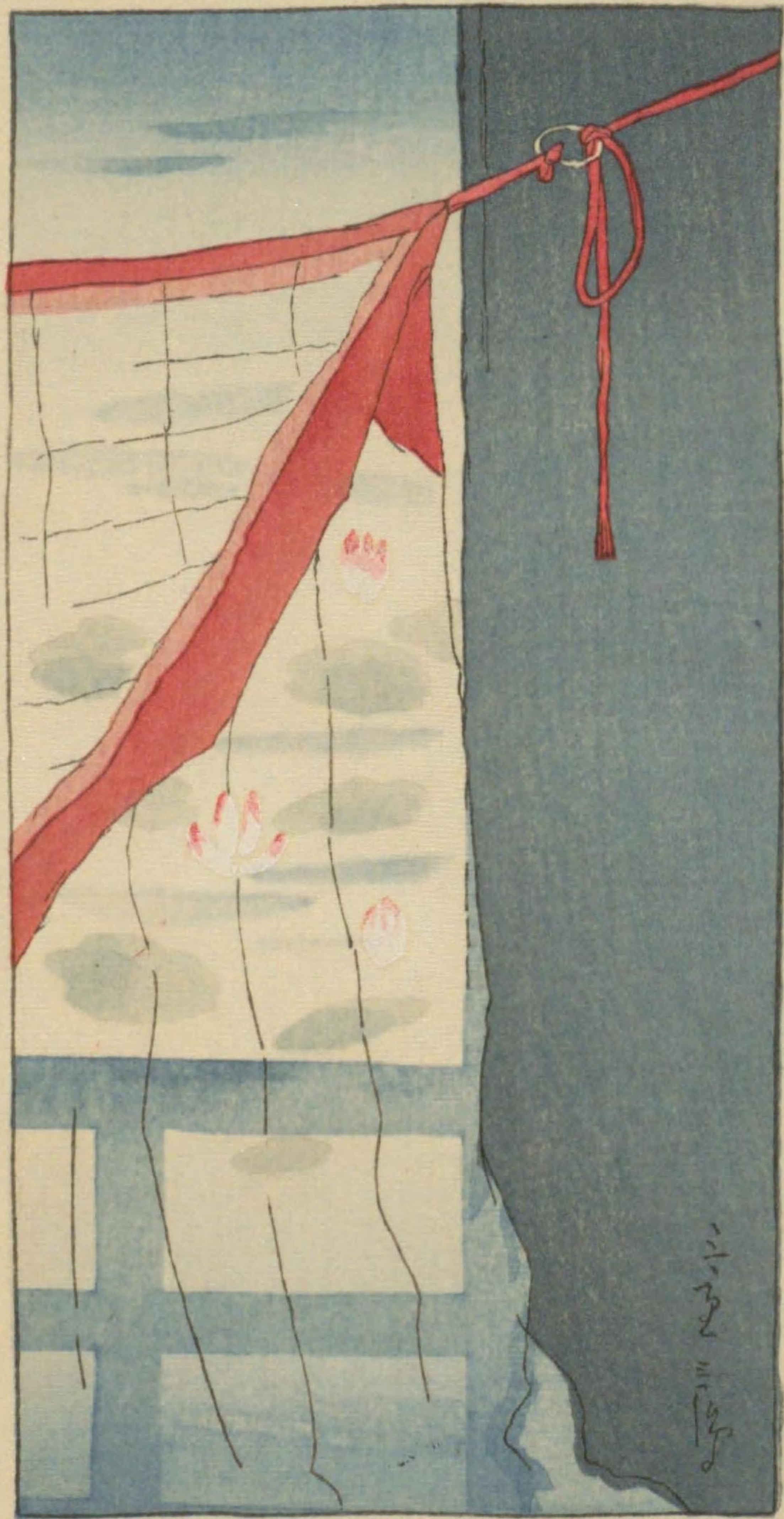


三つと云



涼^{すず}し曙^{あけぼの}蓮^{はす}吹^ふく風^{かぜ}が
紹^あ蚊^が帳^や二^ふ人^{たり}の夢^{ゆめ}さます

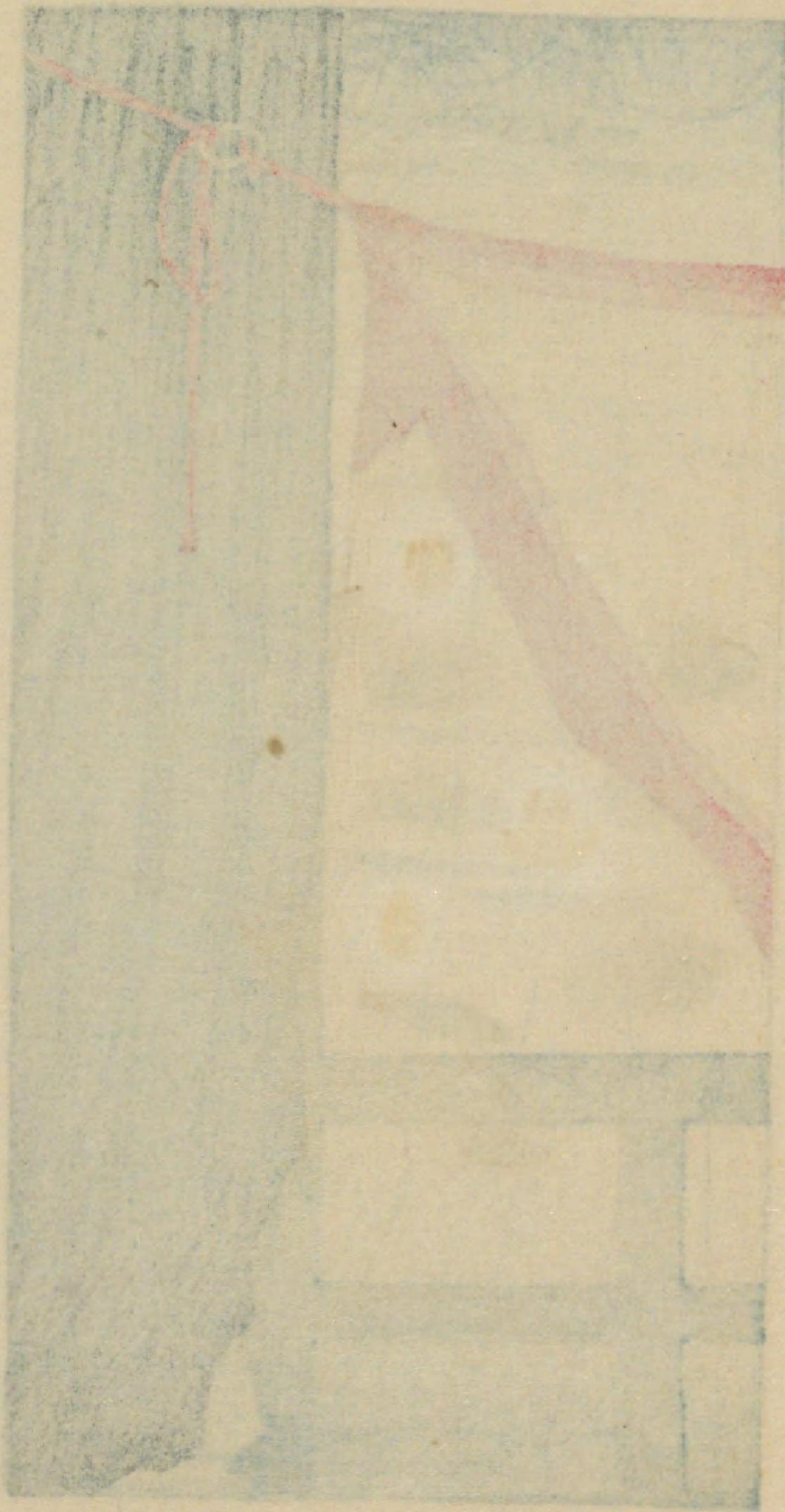
さつと夕^{ゆふ}立^{たち}いつしか霽^はれて
土^み産^{やけ}にのこした水^{みづ}の月^{つき}



涼し曙蓮吹く風が
 紹蚊帳二人の夢さます

さつと夕立いつしか霽れて
 土産にのこした水の月

逢へば別れと
かねては知れど
今朝のきぬぐ
いつより辛らい
この移り香を
なんとせう



あゝ、同じ色の、其紅の脊負上を——女の手では力足らず——鳩
 尾の結癢に——女の手では力足らず、……片手男の力を添へ
 ても尙苦惱に反返る。……世間と、義理と、金子と、無理酒と、苦
 界の勤めに、心を痛め、胸を傷け、身を悩むだ、小篠を、我が膝に
 枕させて、高麗結びを一重に解いて、両手で緊乎と引締める
 ……餘儀ない逢曳の夜半のあるやうに、扱も其の後、扱も其
 後立到つたのである。(白鷺) 鏡花氏



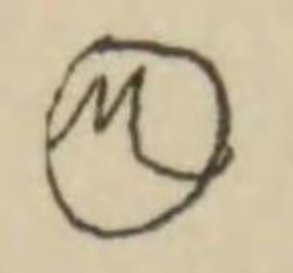
鏡花氏
 白鷺



尾上伊太八

いかに流^{なが}れの身^みぢやとても心^{こころ}に二つはないわいなたとへ
私^{わたし}が請^うけ出^だされ、御新造^{ごしんぞう}さんの奥^{おく}さまのと人^{びと}にかしづき敬^{うやまつ}
はれ、上見^{うへみ}ぬ驚^{おどろ}で暮^くらして居^ゐても厭^{いや}な男^{おとこ}に添寝^{そひね}して、朝夕^{あさゆふ}苦^く
勞^{らう}をするよりも、やつはり二人^{ふたり}が手鍋^{てなべ}さげ、手づから私^{わたし}が飯^い
炊^たいて、内^{うち}の者^{もの}よこちの人^{ひと}翌^{あつ}はどうして斯^かうしてと、言^いふが
樂^{たの}しみ私^{わたし}やうれしい……………(尾上伊太八)

大阪を立退いても
 私の姿目に立てば
 借竹輿に日を送り
 奈良の旅籠や三輪の茶屋
 五日三日夜を明かし
 二十日餘りに四十兩
 つかひ果して二分のこる………(新口村)



薄墨に

書く玉章の思ひして

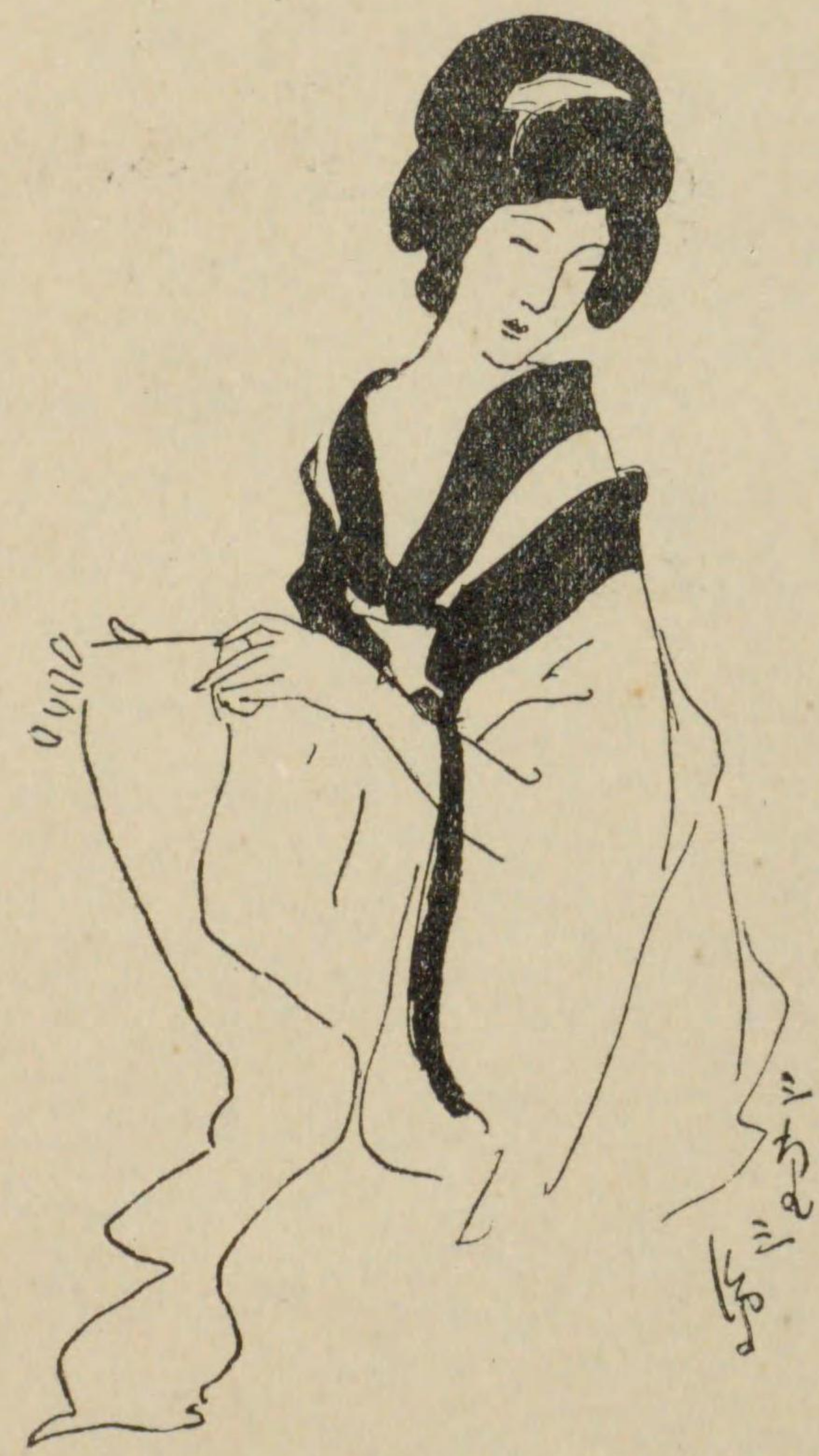
雁なきわたる宵暗に

月影ならで主さんに

焦れて愚痴な疊さん

思ひまはしてまゝならぬ

早く苦界を候かしく





玉勝間あはんと
言ふは誰なるか
逢へる時さへ
面隠しせず

君無くはなど
身装はん櫛匣たる
黄楊の小櫛も
取らんとも思はず



起きてみつ
寝てみつ待てどたよりなく
蚊帳のひろさにたゞひとり
蚊をやく火より胸の火の
もゆる思ひをさつしやんせ



起きてみつ
寝てみつ待てどたよりなく
蚊帳のひろさにたゞひとり
蚊をやく火より胸の火の
もゆる思ひをさつしやんせ

雀^{すずめ}みんなで仲^{なか}よく踊^{をぎ}れ
鳴^{なる}子^こ引^ひくのを合^あひの手^てに
思^し案^{あん}しどころ分^{かん}別^{べつ}どころ
親^{おや}の意^い見^{けん}もきゝどころ





口舌して
 思はせ振りな空寝入り
 奥の座敷の爪弾きが
 つひ媒でそれなりに
 亂る、髪かみの黄楊わづらの櫛くし
 八幡鐘やっぺんかねの後ご鞆たもとに
 別れわかれともなや送り舟おくりふね

「あなた、」

「何うしたの、」

「後生だから、顔を見ないで下さいな、」

梓は思はず顔を背けた。火鉢の火は消えかゝつて、籠洋燈の光も暗い。唯見ると、瘦せた薄と、萎れた女郎花と、桔梗とが吹き亂れて、黒雲空に、月は傾いて照さんとも見えず、あはれに描いた秋草の二枚折の屏風が立つて居るのが、薄暗い灯で、幻のやうで、もの淋しい。

「私泣くんだから、あちらを向いても可くつて？」

梓は頭から寒くなつたが、俯向いて頷くと、蝶吉は向うむきになつて、屏風に影が映つた、その胸をしつかり抱いた。

(湯島詣)

鏡花氏



ニハクニハク

泣いて明かして涙が涸れれあ
そのときふつつり思ひきる

未練と名が付けあ意氣地がないが
惚れたつゞきと思やよい



ニールニール

親おやの譲ゆづりの五本ほんの指ゆびを
四本ほん半はんには誰たれがした
ほんにお前は罪つみなひと



小島虎次郎

夫の討死遊ばすを、妻が知らいで何とせう、二世も三世も女
夫ぢやと、思うて居るに情けない、盃せぬは幸せとは、あんま
りきこえぬ光義さま、祝言さへも濟まぬうち、討死とは曲が
ない、わしやなんぼうでも殺しはせぬ、思ひとまつて給はれ
と……………(太功記十段目)

ミ
ミ
ミ
ミ
ミ





倚りかゝりたる床柱
三味線とつて爪弾の
仇な文句の一と節も
すぎし昔のしのび駒



倚りかゝりたる床柱
三味線とつて爪弾の
仇な文句の一と節も
すぎし昔のしのび駒

そつと打つ眞似鏡で知れて
詫をした手は知らぬ顔
切れて見やがれたおくものか
藁の人形に五寸釘

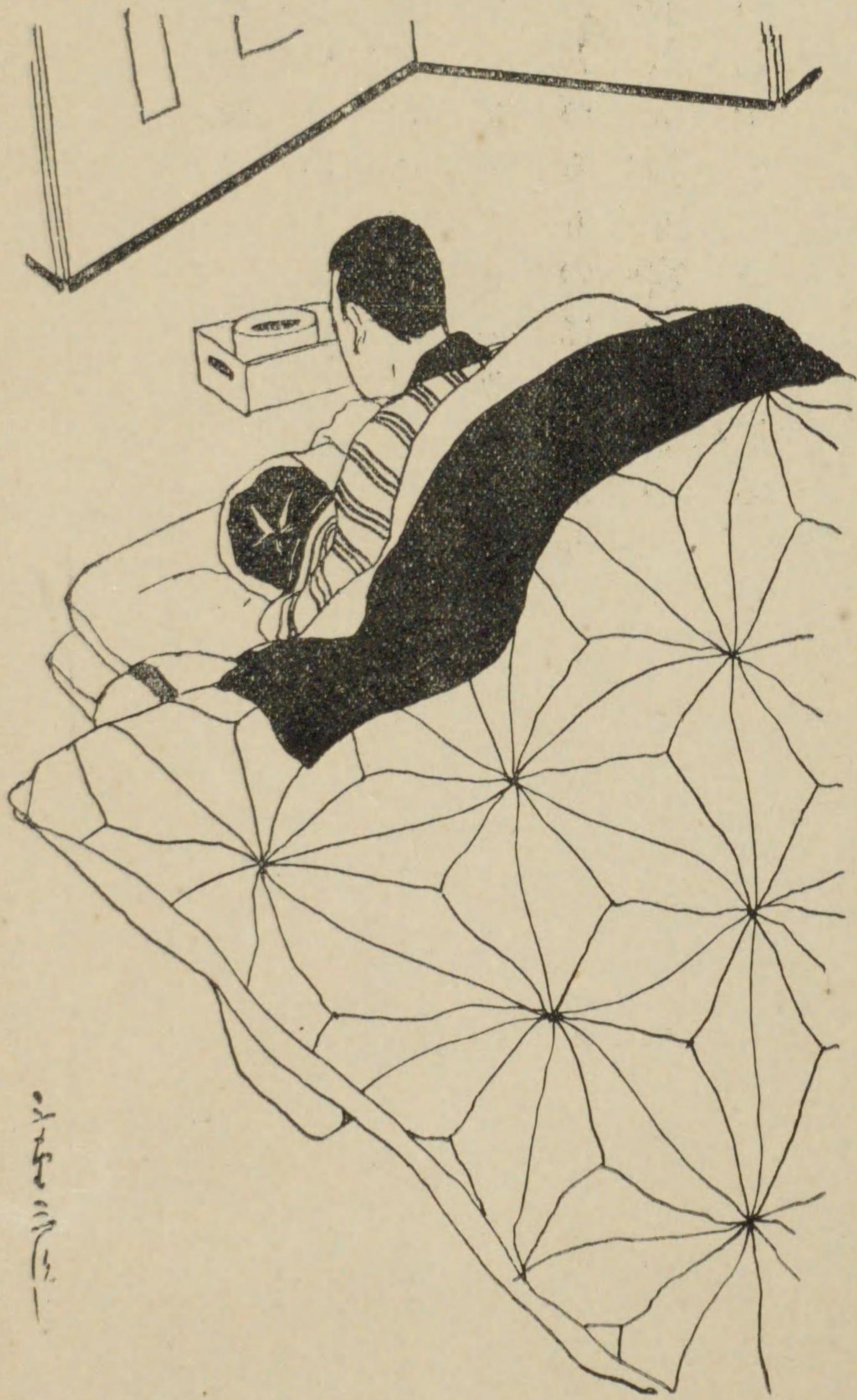




きりの雨
かゝりて袖に濡れ燕
あれ見やしやんせ鳥でさへ
馴れし處をふり捨てゝ
知らぬ他國で苦勞して
やゝをまうけてはるばると
故郷へかへる旅の空
はづかしいではないかいな

御勘當の父上母さま、殊に淺ましいこの形で、誰取次いで呉れる者もあるまい、お目にかゝつて御難儀の様子がどうぞ聞きたやと、さぐればさはる小柴垣、こゝはお庭先のしをり門戸を叩くにも叩かれぬ不孝の報い、此垣一重が鐵の門より高う心から泣く聲さへも憚りて、簀戸にくひつき泣きゐたり。(安達原) 袖萩祭文





三つを三つに

蘭蝶らんてふをきゝつゝかゝるとき死ぬも
 惜をしからじとぞ思おもひ初はじめにし
 辻つじ棲すまのあはぬ話はなしもおもしろや
 かかのきぬぐのうその涙なみだも



11-5-11
11-5-11

秋の夜は
長いものはまんまるな
月見ぬ人の心かも
更けて待てども来ぬ人の
おとづるものは鐘ばかり
數ふる指も寝つきつ
わしやてらされて居るわいな

やがて秋も暮れて、菊花も末枯の十一月の下旬頃、戀し口惜しに身も痩せたお貞さん、唯一本の手紙限り音沙汰なき男の心を恨む側から出る未練時雨、寒き午過を、火鉢の前の洋盃酒、思ひ出したやうに三味線取つて、磯上さんが大好きであつた上方唄の「四つの袖」、爪弾に弾く合の手も理に落ちて、唄は時々口の中、「寧ろ逢はねば斯うした事も、眞にあるまい由なや辛や」、お貞さん鼻を詰まらせてホロ／＼と熱い涙。(四つの袖) 鬼太郎氏





天満に年ふる千早振神にはあらぬ紙さまと世のわに口に
 のるばかり小春に深くあふぬさのくさりあひたる御注進
 繩今は結ぶの神無月せかれて逢はれぬ身となり果て哀れ
 逢瀬の首尾あらばそれを二人が最後日と名残りの文の云
 ひかはし夜毎々々の死覺悟魂ぬけてとぼくと……

(天網島、河庄)



天満に年ふる千早振神にはあらぬ紙さまと世のわに口に
 のるばかり小春に深くあふぬさのくさりあひたる御注進
 繩今は結ぶの神無月せかれて逢はれぬ身となり果て哀れ
 逢瀬の首尾あらばそれを二人が最後日と名残りの文の云
 ひかはし夜毎々々の死覺悟魂ぬけてとぼくと……

(天網島、河庄)

愚痴もでるはず
女ぢやものを
いやなものならなせまた初手に
氣強くいうては下さんせぬ
あきらめ時ときもあつたもの



辛苦島田に今朝結た髪を
様が亂しやる是非もない

こなた思うたらこれ程瘦せた
一と重まはりが三重ほどに



三三三

紙を疊んで
眉毛をかくし
ちよいと齒を染め
うしろ帯
よう似合うたか見やしやんせ
もしへ というて名を呼ばぬ
楽しむ仲の氣樂酒





吉原の夜

腕の紫や一と夜の夢よ
さめりやのろけのあともない
丁と張らんせもし半出たら
わたし賣らんせ吉原へ



拗⁺ねずぢらさずほどにして
可^か愛^{あい}がつたりがられたり
無^む理^りもゆふべの亂^{みだ}れ髪^{かみ}
搔^かき上げながらの笑^{わら}ひ顔^{がほ}

今頃は半七さん、どこにどうして御座らうぞ、今更返へらぬ
 事乍ら、私といふ者ないならば、半兵衛さまもお通に免じ、子
 までなしたる三勝どのを、疾くにも呼び入れさしやんした
 ら、半七様の身持ちもなほり、御勘當もあるまいに、思へば思
 へば此園が、去年の秋の病ひに、いつそ死んで了うたら、斯う
 した難儀は出来まいもの、お氣に入らぬと知りながら、未練
 な私が輪廻ゆる添臥しは叶はずとも、お傍に居たいと辛抱
 して、是まで居たのがお身の仇、今の思ひにくらぶれば、一年
 前にこの園が死ぬる心がつかなんだ……(艶容女舞衣) 酒屋



艶容女舞衣
 酒屋

この本の木版繪の出來映は、彫の大倉九節氏と、刷の田口陽康氏が非常な盛氣と深切とによる好き手際にまつことが多い。
 尙春陽堂の島源四郎氏の隠れた努力にも頭を下げる、屹度氣持のいゝ本が出來上ることと思ふ。

(校正を了へて 三重三)

朝 寢 髪 をはり

昭和二年七月十二日印刷
 昭和二年七月十五日發行

定價金貳圓八拾錢

著者 清水 三重三

發行者 和 田 利 彦
 東京市日本橋區通四丁目五番地

印刷者 龜 谷 良 一
 東京市本郷區眞砂町三十六番地

印刷所 日東印刷株式會社
 東京市本郷區眞砂町三十六番地

朝 寢 髪

章之權作者



發行所

東京市日本橋區
 通四丁目五番地

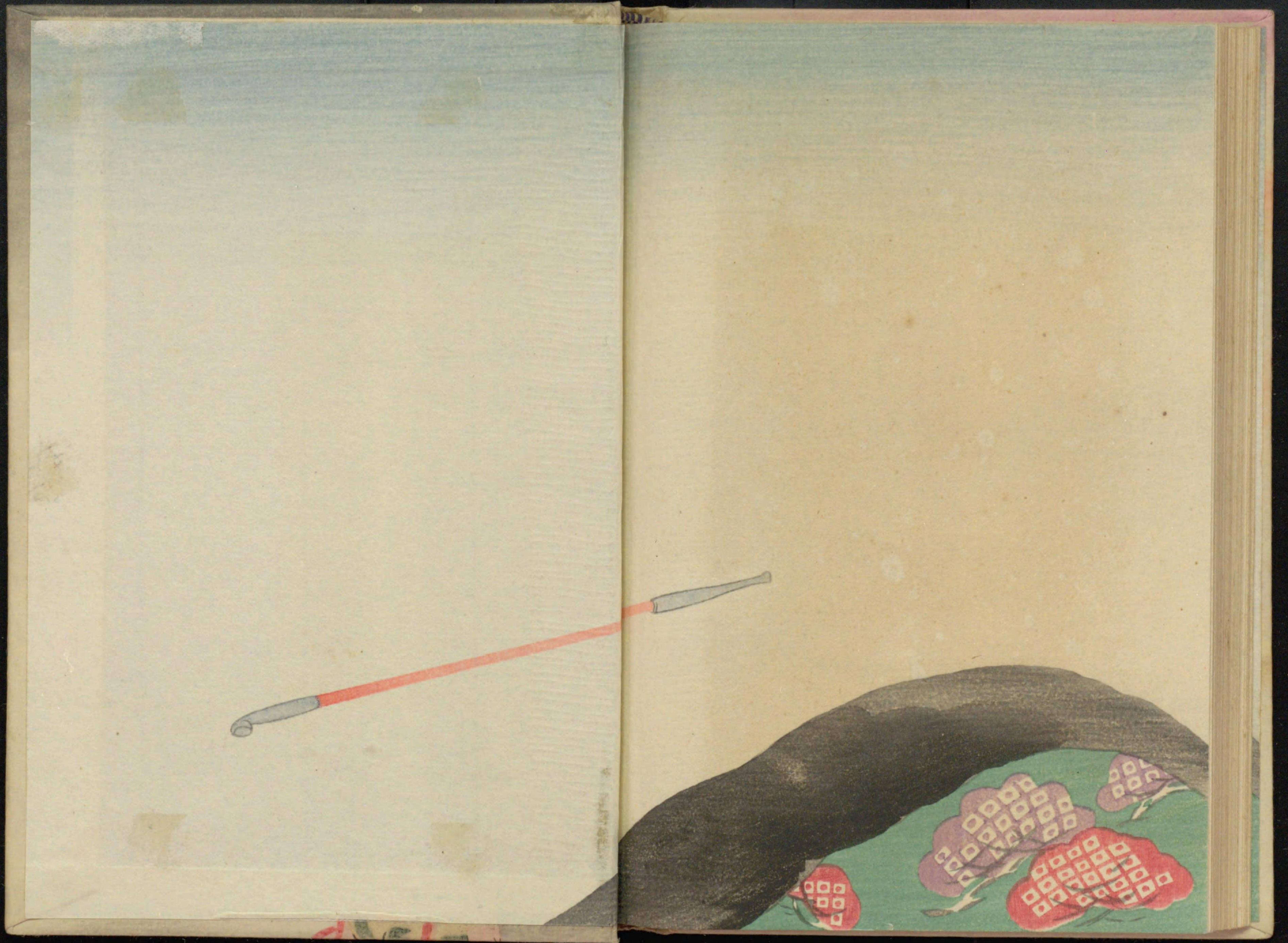
春 陽 堂

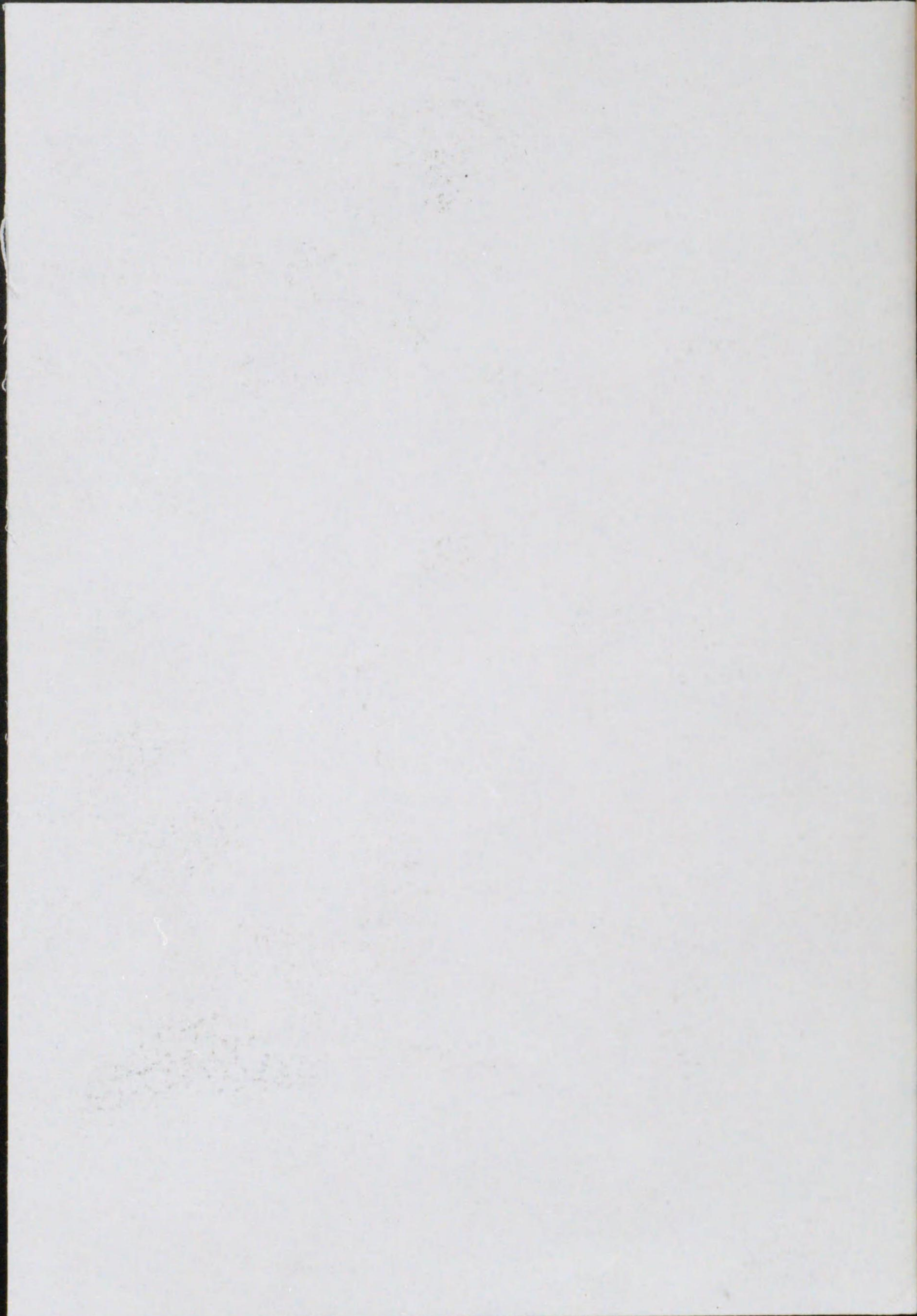
振替東京一六一七
 電話日本橋六四一
 番番七

⑧

○ 144 / 10

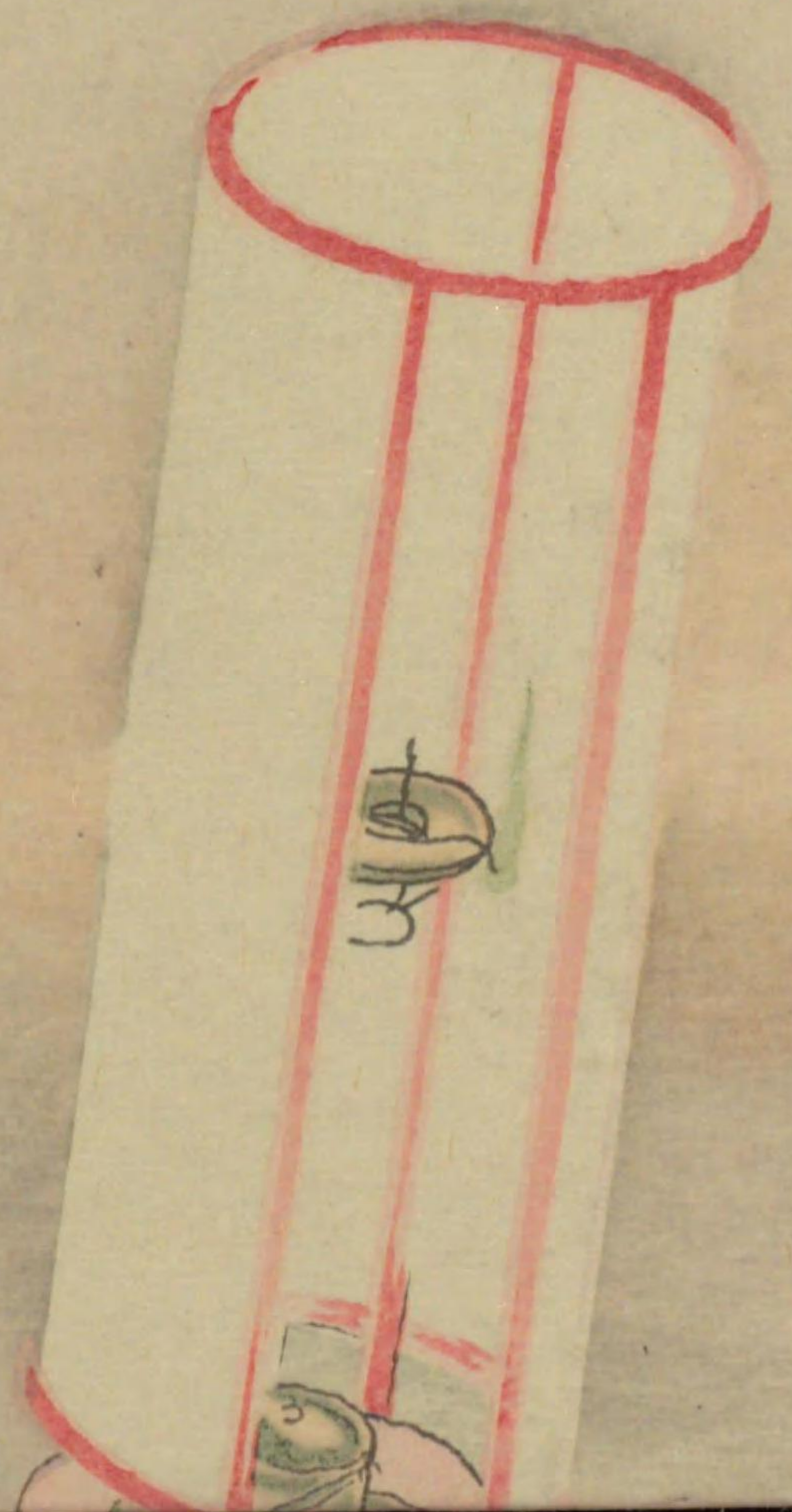






Handwritten text on the spine of the book, partially obscured and illegible.

8
3

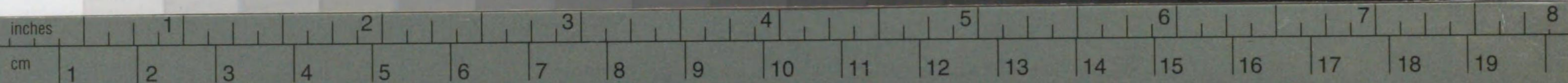


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

